

だが其「It」は一時に可能なる譯のものではない。段階的に可能なのである。各々個々の新しい民族精神は、世界精神を獲得せんが爲の新らしい段階に他ならない。其意識、其自由を得るに至る段階なのである。斯くして世界精神は低き制約より高き原理へ、それ自身の概念に、其理念の發展進化せる表現にまで進んで行く。

斯様にして彼の観る所では、世界史の目的は何であるかと言へば「精神が自ら眞に何であるかと言ふ事を知識する事」である。之れを現存の世界に實現せしむる事である。客觀的のものとして、持つて來る事である。で世界史とはつまり、斯様な目的を將來したものにも他ならない。更に詳言すれば世界史は史的過程の叙述である。精神が自らその眞理を知り、又實現する段階の叙述である。其處には自己認識の、即自覺の凡ゆる段階が存する。最高の命令が存する。かくて精神の本質は自分自らを認識する事なのである。自らが何であるか。あるがまゝのものとして知る事である。斯かるものを世界史に於いて將來し、又自ら制約されし形として自らを創造する。之が彼の「歴史の理念」である。即ちヘーゲルに在つては、歴史とは人間自覺の行に外ならない。かゝる人類精神發展の記録が即ち歴史なのである。思想が凡ての歴史上の推移變遷や發展をば規定すると云ふ處に、觀念論の中心眼目が存する。唯物史觀は正しく之と正反對の立場に立つものであつて、かゝる變化發展は物に依つて規定されると主張する。されば彼等に在つては、

思惟の形式 = 存在の形式 = 歴史發展の形式

と云ふ事になつた。併しヘーゲルの觀念論に依れば、辯證法とは思惟發展の形式である。思想なき處に事實もなく、歴史もない。だからマルクスの唯物論的辯證法はヘーゲルの夫を誤用する事も甚しい。マルクス學徒はヘーゲルの辯證法を目して逆立ちして居ると云ふが、我等から見れば彼等の辯證法こそ逆立ちして居るのである。否辯證法その者を理解せざるも甚しいと云はねばならぬ。

V ヘーゲルの歴史哲學（その二）

1

何にしても、マルクスの學説は我が思想界を風靡したかの觀がある。所が右傾の思想家達は、之を以つて我が思想界を亂すも甚だしいものだと言つて、排撃するのである。私は此のマルキシズムに對して辯護しやうとは思はないが、只徒らに排撃するのみが能でもあるまい。其思想に於いて採るべき所は採り、長所として認むべきものは認めるのが、學者思想家の當然の任務でなければならぬ。それならば、マルキシズムが我が思想界に與へた貢獻は何であらうか。それは外でもない。歴史哲學的考察を導入した所に、それを認めやうと私は思ふ。即ち總ての事象をば歴史發展の過程として考へるのが、彼の思想に於ける重要な特徴をなしてゐる。

然るに此の考へ方はもとより彼の創見ではなかつた。ヘーゲルの思想に負ふてゐるのである。別言すれば、彼の歴史哲學的考察の態度は、全くヘーゲルに學んだものであつた。彼の以つて大いなる武器となす辯證法にしてからが、徹頭徹尾ヘーゲルの辯證法を襲用したものに外ならない。只兩者の異なる所は觀念論的であるか唯物論的であるかと言ふ所に存する。それ故にマルクスに對する眞の理解はヘーゲルの哲學態度を學ぶ事によつて始めて、其全きを得るであらう。所でヘーゲル哲學の中心は元より辯證法にある。その辯證法は、其の方法態度其者が既に歴史哲學的である。だからしてヘーゲル哲學の根本中心をば、私は歴史哲學にありと觀るのだが、それは必ずしも不當ではあるまい。それで今更に繰返して彼の歴史哲學に就いて述べやうとするのは、無意味な業でもないであらうと思ふのである。

2

歴史哲學と言へば言ふまでもなく、歴史に對する哲學的考察である。歴史に對する反省である。斯かる歴史哲學的考察は、別段新しい事ではなく、ギリシヤに於いて哲學の誕生と共に生れたと言つてよい。プラトーン、アリストテレス以來、中世を経て其片影は見出すに難くはない。カントに於いても元より此の考察が試みられてゐる。然し乍ら、歴史哲學的の著作と見るべきものは「實踐理性批判」の末尾、及び「永遠の平和」位のものであつて、それは必ずしも體系をなしてゐるものではなかつた。フキヒテに至つては、其歴史哲學的考察はカントよりも濃厚に現はれてゐる。彼の有名な講演「獨逸國民に告ぐ」や「學者の任務」と言つたやうなものには、よく之を視ふ事が出来るであらう。然るに之は歴史に對する反省ではあるが、未だヘーゲルの如く整然たる體系をなしてゐるとは言はれない。

ヘーゲル哲學の方法は前にも述べたやうに、辯證論が其根本特徴をなすと共に、此の方法こそ歴史哲學となるべき契機をなすものである。此の辯證法にした所で、何もヘーゲルの創見といふのではなく、既にフキヒテに於いて之は意識的に用ひられてゐるものである。然し乍ら、之は彼の全哲學を一貫してゐるものだとは言はれない。其完成或ひは徹底は何にしても、ヘーゲルを俟たねばならない。フキヒテに於ける辯證法は然らば如何なるものであつたか。彼に依れば、總ての理性行爲が何等かの職分を満さねばならないとするならば、現性自身の内部に於いて、斯様な職分と其行爲との間に、何かしら矛盾が存する筈である。蓋し此の兩者の完全なる一致、即ちカントにとつて道德命令なるものは、それが實現された時には最早對象は無くなつて仕舞ふ譯である。斯く満され或は實現されて仕舞ふならば、斯様な機能の本質は怪しきものになるであらう。然るにフキヒテに於いて其哲學の中心概念とされたる當爲 (sollen) の概念は、任務と實際的行爲との間の矛盾を要求してゐる。彼の知識論は斯様な矛盾をば、理性の本質の中に置くものであつた。此所に吾々は辯證法の萌芽を見出し得るであらう。更に詳言すれば、理性行爲の目的論的展開は、即ち次ぎのやうな次第を示す事となるであらう。詰り任務と第一の行爲との間の矛盾によつて、第二者の必然性が生じて来る。第二のものは未だ不充分なものとして第三者が規定される。斯様な具合に無限に進展する。そして第一なる最初の行爲に還つて来る。斯くして理性行爲の全圓周は組織的に大團圓する譯である。斯かる意味でフキヒテの方法は矛盾の方法である。理性形式をば其根本原理より展開せしめるのが辯證法である。こゝに我等はヘーゲルの辯證法が既に豫想されて居る事を知るであらう。

3

轉じてヘーゲルの歴史哲學を明かにするために、我等は之を獨逸西南學派のそれと比較して見やうと思ふ。西南學派は世界大戰の前後から約十年の間、我が思想界を支配してゐた哲學である。新カント學派の一派である事も既に知られてゐる。色々な意味に於いて、此の學派の功績は認められるであらうが、私は其最大のものをば、歴史哲學の面にあつたと考へる。而も此の學派の二大代表者、ヴキヒンデルバンド及びリツカートが其もたらした貢獻は、夫々異つてゐるやうに思はれる。リツカートは其著「歴史哲學の諸問題」に於いて、歴史の職分をば、

一、歴史學方法論

二、歴史の理念論

の二つに分けてゐる。

所が此の學派が學界に對して、多大のセンセーションを起こしたのは歴史方法論であつた。即ち史學に對する特有なる方法を明かにするところにあつた。彼等によれば、歴史認識の方法は自然科學と

は異つた方法を採つてゐる。自然科学の方法は一般化であるに反し、史學の方法は個性化である。自然科學が没價值的な考へによるものであるのに反し、史學は價值關係の方法によつて成り立つものである。此所に自然科学と史學とは截然區別されなければならぬと彼等は主張する。

元々ロツツエに暗示せられて、ヴキンドルバンドは此所に想到したのであるが、其考へを徹底し、整然たる姿に纏め上げるためには、リツカートを俟たなければならなかつた。夫故史學方法論に於いても、之に論及した功績はヴキンドルバンドに認めなければならぬけれども、集大成者としてはリツカート其人であつた。然し乍ら、若し夫れ歴史の理念論に至つては、リツカートは到底ヴキンドルバンドに追隨を許さない。此の面に對するヴキンドルバンドの考察は、彼の名著「ブレルヂェン」(拙譯「哲學の根本問題」)の上下二卷の隨所に、我等は其深き思索の跡を見出すであらう。

4

然らばヴキンドルバンドは歴史の理念をば何と見たか。一體歴史の理念といふのが、言葉其者は抑々何を意味するであらうか。右に述べたやうに、歴史哲學は二つの部面に分かれると言つたが、私は最中心をば「歴史の理念論」にありと觀るものである。それにしてもヴキンドルバンドの解する歴史の理念といふ概念と、ヘーゲルに於ける歴史の理念の概念とは異つてゐる。ヴキンドルバンドに於いては

理念といふ語は理想といふやうに解せられた。言はば、文化價値の最後究極と言つたやうな價值概念である。かゝる理念をば彼は「人類の統一」と見た。詰り人間は營々として歴史を作つて行く。そこに何等かの最後の目標がなければならぬ。それを彼は「人類の統一」といふ所に見出した。然るに私は此の點に於いて少なからず疑問を持つてゐた。そして長い間解く事を得なかつたものである。

それならば私の疑ひはどこにあるか。元來カント哲學の考へによれば歴史哲學は認識論や、道德哲學や、或は宗教哲學と相並んで彼等の哲學體系の一部門をなすものである。寧ろ、其最後の部門をなす。夫だから歴史哲學の最後の問題たる歴史の理念は、人類が最後に到達すべき境地といふ事になる。

ヴキンドルバンドも亦そう考へてゐた。それならば彼が以つて歴史の理念となす人類の統一と、彼の所謂眞、善、美などといふ價値なる體系とは如何なる關係にあるか。此の點甚だ不明である。彼は熱情を以つて此の歴史の理念を説くけれども、斯かる難點は如何にしても免れ難い。

所が今ヘーゲルに於いては、精神の發展の過程は正、反、合の辯證法の秩序を辿る。かゝる辯證法的過程は精神發展の段階であるが、此の精神なくんば歴史はない。それだから辯證法は歴史發展の段階でもある。又同時に歴史認識の方法ともなるのである。之はフキヒテの辯證法的考察をば一層徹底したものと元より見る事が出来る。然るに歴史の理念は彼に於いてヴキンドルバンドの如く歴史生活に對する理想或は其目標ではなくして、むしろ歴史統一の原理といふ風に解せられてゐる。此の原

理なくんば歴史は成り立たない。理念はそれで精神が精神を反省する働きの中心だと見られるであらう。彼は之をば自覺だと見た。彼が歴史を以つて自由の意識に於ける進歩だ、と言つたのは此の意味である。斯くヘーゲルに於いては、ヴギンデルバンド等に於て見る如き不整合さが無い。

5

西南學派に於いては「歴史一般」、「歴史學」、「歴史哲學」といふこの三つのものは截然區別されてゐる。彼等に依れば、歴史一般の世界は無限に廣く、歴史的宇宙といふ程、殆ど際涯ない位なものである。之等は歴史學以前といふべきものであるし、歴史學として成り立つてゐるのは、其歴史一般の中の極めて限られたる領域にすぎない。夫だから彼等が此の史學を以つて「書かれたる歴史」となし、「書かれざる歴史」と明かに區別しやうとする。然し乍らヘーゲルは此の區別を認めやうとしない。彼にすれば、認識されない歴史の世界はあり得ない。吾々から認識の限界に入つて始めて、歴史は歴史たり得るのである。こゝにヘーゲルが西南學派の考へと明かに相違してゐる事が知られるであらう。

更に又、西南學派に依れば、歴史學は科學としての史學であつて、歴史哲學ではない。其間に截然たる區別がある。彼等の言葉を以つてすれば、即ち、兩者の方法は異なるものであるといふ。然るにヘーゲルの考ふる所によれば、思想のない所に歴史はない。歴史が歴史として成り立つのは思想による。其間に科學と哲學との區別は存しない。夫故ヘーゲルにあつては、歴史は即ち史學であり、史學は又同時に歴史哲學であつた。其間に方法上の相違もあり得ない。辯證法は歴史發展の秩序であるが、之は又、思想發展の秩序なので、歴史哲學の方法でもある。彼の歴史哲學に關する著述を見ても、西南學派の所謂歴史哲學と史學といふものが、共に叙述せられてゐる。夫れを難する向きもあるが、之は聽て彼の歴史哲學の特色をなすものであると言ひ得る。何にしても整然一貫せる彼の思索の深さと偉大さには、私は只頭を下げざるを得ない。

VI ヘーゲルの宗教哲學

1

古代の哲學は或る意味に於て哲學を以て宗教に代はらんとしたものである。新プラトーン學派以來中世哲學はかゝる色彩が濃かつた。かうしてカント以前までは、凡ての哲學は形而上學なる姿をとつて宇宙の實在を論じた。併しながら、カント現はれて形而上學は學問として成立しないと宣言された。即ち認識論が哲學の中心問題となつた。所謂批判的なる認識論が彼に依つて創じられるのであつた。かゝる考察に於て彼が様々なる學的意義を史上に残したのは云ふまでもない。ちやうどコペルニカスが天動説を轉じて地動説と變へたやうに、今迄の種々な考へ方を一變するのだつた。分けても注目すべきは價值と實在との峻別である。所謂 *Sollen* と *Sein* との對立である。かうある事は必ずしもかうあるべき事ではない。理想と現實との撞著にいかにも多くの人がなやんで居る事か。それに依つてもカントのいはんとする眞意は略ぼ想像されるであらう。かゝる價值と實在との峻別は、もとより私達に深い暗示を與へる。だがそこに我等は救ふべからざる悲哀を覺えないであらうか。價值は永遠に價值であつて實在でない。理想は永遠に理想として現實に來るの日はない。果してそうであるならば

無限なる彼岸と、只あはき光を仰いで地上に蠢動するのが、我等の運命ではないか。現實の世に理想を具現し、地上に神の王國を樹てんとするのが、われらのひたすらなる願ひなのに、斯くては人間百千の努力も果敢なき望みではないか。死して彼の西方淨土の極樂に至るのは有難いに違ひないが、われらこの身このまゝ救はれないのである。尊い價值をこの地上に實現し度いのが山々である。併しカントは飽迄も價值は價值であつて實在ではないと云ふ。かくても尙哲學はわれらの救ひたり得るか。まことに價值と實在との峻別はカントの大なる發見である。だがわれらの全人間の要求としては、價值と實在とが融合一致せる境地である。われらはこゝに大きな溝を見出さざるを得ない、かゝる日に私はヘーゲル哲學を思ふ。

2

「現實的のものは合理的なり、合理的なものは現實的なり」と見るヘーゲルの眼には、ありとしまるものが理性必然の發展であつた。價值と實在とを區別するの必要は彼にはなかつた。理性は即ち現實であつた。當爲は即ち實在であつた。彼の眼から見れば、カント一派の教へが所謂 *Sollenkrankheit* (當爲病) にかゝつて居ると見えるのも無理はなかつた。かうして彼の哲學思想は汎論理主義であると考へられて來た。史家エドワード・エルドマンが (汎論理主義) *Panlogismus* であるとヘーゲル

を解して以來、この解釋は殆んど學界の定説となつて居る。

若しかゝる解釋をとつて凡てを論理必然の發展なりとし、論理を以て至上なりとするならば、由來非論理的にして、非合理性を多分にふくむ宗教はいかなる地位をもつ事とならうか。宗教は次の段階にあるもので、哲學こそその上に來り、最高に位し、絶對精神を十全の形に現はし得るものであると。かく哲學史學クローノー・フキツシャー始め多くは解して來た。かくてヘーゲルはむしろ宗教に對して冷淡でありしかのやうに思はれて來た。波多野博士もその著「西洋哲學史要」中、ヘーゲルの哲學を叙べて

「精神が自ら絶對なるを意識するに至りし者、換言すれば有限の姿に現はれながら、自己本來の無限なるを意識するに至りし者は即ち、絶對的精神なり。是精神開展の最高階級をなす者なり。絶對的精神は三つの形に現はれる。美術、宗教、哲學、即是なり。されば是等三つの者は共に絶對者の自己認識なり。されど美術及宗教に於てはその自己認識未だ完全ならず。美術は絶對的精神を直觀の形に、宗教はそれを感情及表象の形に表はす。而るに絶對者は元來論理的也。その認識の形式亦その本質に適へる者ならざるべからず。されば絶對的精神は概念の形に於て始めて完全なる發表を見るなり。是即ち哲學なり。哲學は最も高等なる最も完全なる眞理なり。ロゴス開展の最高の階段なり。」

と言つてゐられる。

又わが國の哲學界でヘーゲル研究の權威にして、而もヘーゲルの思想に深い關係にある否「ヘーゲルの論理を現代的のものたらしめんとする」紀平博士も、宗教を以て哲學の次におかれて居る。即ち博士の名著「行の哲學」中、知信の關係に就て

「斯く只管信ぜざるべからざる所以、即ち佛知を不思議となしおかざるべからざる所以は、畢竟媒介が媒介としては、何れにも論ずるべからざると云ふ論理的の規定を、論理的に完成する能はずして、依然表象的に即ち二元對立の上に殘留して之を解釋せんと欲するが爲なり。」

更にまた

「換言すれば宗教的方法は正に他の方法へと——即ち新に得たる形式と力とを有する知へと——その針路を轉ぜざるべからず。」

と言ふやうな語に博士の宗教觀を窺ひ得られるであらう。

之は紀平博士の自説であつて、之を以て直ちに博士のヘーゲル解釋だとは見られまい。でも略ぼ同様な考へがヘーゲルの宗教觀であると考へられて居る。さきの波多野博士の所論を見ても夫は明かである。だが私はこゝに疑をもつて居る。即ち夫は畢竟ヘーゲルをば汎論理主義と觀る見解に、出發して居るのではあるまいか。然るに彼を以て汎論理主義と觀る事に對しては、漸く近時異論が現はれて

來た。「Junghegelianismus」「青年ヘーゲル主義」の運動がそれである。

3

十九世紀の中葉ヘーゲルの歿後、獨逸思想界を風靡したヘーゲル主義は次第に凋落の色を呈し、唯物論の凱歌となつた。だが、唯物思想は長く思想の王國に君臨するを得ないで、カント復興の聲が十九世紀末葉から漸く高くなつた。新カント學派の旗幟には、二十世紀初頭から現在に至るまで向ふ敵なき有様である。でもかゝる一方ヘーゲル學徒は徒らに黙々としては居なかつた。即ちヘーゲルの論理を現代的に適用し解釋せんとする一群の思想家あるを忘れてはならぬ。伊太利に於ては、ベネデツト・クロチエ博士の如き、わが國では紀平正美博士の如きが夫れである。かゝる意味に於て之等の思想家を、新ヘーゲル學派と稱ぶ事が出來やう。

「青年ヘーゲル主義」は併し新ヘーゲル學派ではない。新ヘーゲル學派はさきにも云つたやうに、ヘーゲルの論理の現代的適用であるに反して、「青年ヘーゲル主義」は青年期のヘーゲルの著作を重視する。従前のヘーゲルの著作として考へられしものは、一八〇七年ヘーゲルのイェーナ期における「現象論」(Phänomenologie des Geistes) 以來のものである。Encyclopädie 然り、Logik 然りである。一八〇七年以前の作物は全く顧られなかつた。否その存在だも知られなかつた。エドワード・エルド

マンやクローノー・フキツシャヤは之を知らなかつた。一九一〇年ウキルヘルム・ヴキンデルバンドは、「Erneuerung des Hegelianismus」(ヘーゲル主義の改新)を論じたが、一言之に論及して居ない。又クロチエ博士のヘーゲル解釋上の名著「Das Lebende und das Tote des Hegelianismus」(ヘーゲル哲學の意義と難點)に於ても之には觸れては居ない。かくて我等はヘーゲル青年期の作物を發見せし功績をば、我ウイリヘルム・ディルタイに歸せねばならぬ。之に刺戟せられてヘーゲル解釋は次第と變つて來た。「青年ヘーゲル主義」の擡頭は即ち之に外ならぬ。

それならば謂ふところの青年ヘーゲル主義の根本特徴はいづこに存するか。この派の領袖クローナーは其の近著「Von Kant bis Hegel」「カントよりヘーゲル」のなかで云つて居る。

『曾つてエドワード・エルドマンに依つて叫ばれた、汎論理主義なる誤解を改める事は緊急の必要だと云はねばならぬ。若し今ヘーゲルの辯證論における合理的特徴を強調しないで、非合理的特徴を力説するならば、かゝる目的は達せられるのである。』

と。之に依つてもこの學派が、どんな處に目標をおいて居るかが略ぼ知られるであらう。かう解する時分に又新しい誤解や不都合が起きないとは保證されぬ。それでもかやうに見る處にこそ、ヘーゲルの眞精神を見出されると主張するのである。

さうだ青年ヘーゲル學派の力點がヘーゲル思想における非合理性の強調にある。かゝる意味におい

て私は所謂生命哲學と深く一味相通するものがあると思ふ。由來私はプラグマチズムやヒューマニズム乃至ベルグソンの創造の哲學などには、深い々々興味をもつものである。生命至上の哲學に就いてはそれで幾度びかすでに論じた。だけれども之等の學派が、その學的反省の足らないのを大變憾みに思ふたものである。さればこそ更に學的思索と論理的反省を求めたい許りに、ハイデルベルグのリツカート教授の門を叩いたのであつた。リツカート教授はカントの精神を汲む新カント學派の哲學者である。彼は混沌たるものを截然分つ事を以て哲學の任務とする。かくて彼は内容と形式とを分ち、形式の規定究明をば哲學の業となし、内容を顧みない。内容の非合理なるは認めるけれども、形式のみを論理的研究の對象となすのである。價值と實在とを分けたカントの態度に私達は無限の尊敬を拂ふを忘れなかつたが、人間としての深い悲しみを覺えないでは居られなかつた。之と同様に、リツカートの徹底せる論理的態度に強く私は引きつけられるけれども、深い疑惑に陥らざるを得ない。『思惟が單純なる論理的要求に止る間は、如何にして創造せらるべき内容ある事を考へ得べきか。思惟に對して潜在的に與へられたる問題としての非合理性の難問を残さざるを得ない。』と言ふのは、獨り左右田博士のみの疑問ではあるまいと思ふ。(同博士著「經濟哲學の諸問題」)

かやうに論じ來る場合に青年ヘーゲル學徒が、ヘーゲル思索に於ては非合理性がその思想體系の前景をなし、その基調をなすと見る以上、それは私達に何等かの示唆とならずに居ない。青年ヘーゲル學徒派に對する私の研究は未だ十分ではない。そこに種々の疑問をなげ出されて居る。併し私之の之の思索に對し喜ばしい光を示して居る事をこゝに告白せねばならぬ。何故と言つて生命を雄々しく生かさんとする生命哲學には、論理の反省が足りぬを不満に思つた私である。だのに今このヘーゲルの解釋は斯る不満を凡て満してくれるやうに思はれるのだ。もしかやうにヘーゲルの哲學を解するならば、ヘーゲルの宗教觀も從前の解釋に勢ひ變化を受けるのは容易に推察されるであらう。今ヘーゲルの青年期の作物を見れば、二三の政治論などの著作を外にしては、悉く宗教上の思索の跡である。決して彼は宗教に對して無關心でなく、冷淡でなかつた。

わけてもその力作は『キリストの生涯』である。否宗教を低く考へて居る人でなかつた事を知るのである。而もそれは只青年期のみ思想ではない。この考へは後年にまで及んで居る。それで今少しく彼の思想圓熟期におけるその宗教哲學を檢討して見やう。そのために格好の書として、ポーランドの編したヘーゲルの「宗教哲學」(一九〇七年出版)なる書をあげ度い惜しい事には今絶版になつて、私は之を手に入れる事は出来なかつた。だが幸な事には、デオーグ・ラツソン博士の編にかゝるフェリックス・マイナーの「哲學叢書」の一編なる「Hegels Begriff der Religion」(ヘーゲルの宗教概念)(一九

二四年出版)がある。之はヘーゲルが伯林大學などで講義せる草稿を編したものであるから、ポラ
ンドの編とは多少の相違があるかも知れない。併しその根本思想に違ひのある筈はない。

ヘーゲルは云ふ『人が人たる所以は意識あるが故である。思想一般であるからだ。尙彼が精神なる
が故である。人間は思考し又精神なるが故に永遠の意識である。』即ちこゝに彼は人間と動物との根
本相違を認めた。然るに宗教は彼に依れば『神との關係の意識』でもつた。哲學が最高絶對をその對
象とする如く、宗教の對象も亦彼によれば最高絶對であつた。その間に何等優劣や高低の區別が存し
なかつた。否存するを得ないのである。何故と云つて『萬物は神より出でて、又神にかへり行くので
ある。』而も神の榮光と尊敬とを明かにするため、宗教生活が存するのである。

宗教の何たるかをかくも深く洞察した彼は、併し同時に神學に對して尊敬を拂ふ事は出来なかつた。
それは何故であらうか。現實のものを合理と見又合理のものを現實と見た彼の目には、眞理は決して
此空でなくて、具體でなければならなかつた。内容の充實したものであつた。然かもその内容は、即
ち神學に依つてかき消されたのである。かくして彼は神學を眞理の冒瀆者として、強い怒さへもつた
のである。眞理がかゝるものである以上、宗教敬虔の絶對性は彼にあつて理想でなく、彼岸の花でな
く現實でなければならなかつた。

同時にまた神は無内容のものではない。白紙でない。生ける現實の神であつた。まことに宗教は神
的精神の産物なのである。決して人間の單なる發見だと云つてはならない。神的なる働きの創造では
ないか。之に依つても彼がいかに深い宗教の理解者であつたかを窺い得やう。

『地上の限られたる視野よりぬけ出で、群峯の頂きによち登るならば、我等は蒼空の高き處をか
い間見る事が出来やう。浮世より離れていと靜かに様々の風物や、束縛多き世の様をながめる事が
出来やう。宗教生活は正にかくの如きものである。一度此のわれらが宗教の精神の高峯に登つて世
のわづらひより離れて見れば、それらの様々の世相は畢竟飛び行く影と觀ぜられやう。否愛の心と
法悦の念もて之を照らせば、之らは永久の平安にとは入るではないか。』

是などは深き宗教の體驗者にあらずんば、云ひ得ぬ言葉でなからうか。

かくて彼は宗教と哲學とが都合よく融合するを信じた。否あらゆる文化現象は宗教に於て、その第
一の中心點を見出すのであると考へた。神の思想、神の意識、神の感情に於て、その中心點を得るので
ある。神こそは萬物のアルファにしてオメガである。『Sie alle (Kunst, Wissenschaft, Sitten) finden
ihren Mittelpunkt in der Religion, in dem einen Gedanken, Bewusstsein, Gefühle Gottes. Er ist der
Ausgangspunkt von allen und das Ende von allen.』これ等の思想は私の持論たる宗教を以て綜合文
化となす者と髣髴たるものがあるので、衷心喜びを感じないでは居なれぬ。この綜合文化の詳しい事
に就いては拙著『宗教文化の創造』(厚生閣發行)及び『宗教の門』(大阪屋號書店發行)などを讀ん

で頂いたならば幸ひである。併しこの私の綜合文化論は、ヘーゲル哲學から少しも影響を受けて居ない。むしろかの新カント學派の流れを汲んで居る事を告げておかねばならぬ。併し今日に於ける私自身の宗教論を語るのには、今の場合ではない。之を他の機會にゆづる事とする。此カント流の考へとヘーゲル哲學思想とを、いかに融合して私自身の思想體系となすかは、之を他日にまたねばならぬ。

VII ヘーゲル學徒 ベネデツト・クローチエ

私の伊太利への旅は、もう幾年か前の春の休みに企てられたのだつた。旅の連れとしては、岩崎、大江の兩君があつた。ミラノ、ゼノア、ローマなどの古い都々を経て、ナポリに入つた。こここの美術館には彫刻作品の素晴らしいものがあつた。でも、もつと私を喜ばしたものがあつた。夫れは他ではない。クローチエ博士の訪問であつた。博士が此處に在ると聞いて、この都に對する私の憧憬はどんなに強かつたか分らない。私達の汽車がこの町に着いたのは春まだ浅き夕暮こめた七時頃だつた。宿にくなり晚餐をとつて、早速博士に電話をかけた。東洋から來た無名の學徒で、紹介状ももつて居ないが訪問出來まいかと問ふた。直ぐにも待つてゐるからとの事で、あたふたと馬車に乗つた。ツリニタマデヨールのその邸宅の門を叩いたのは、彼是十時も廻つてゐる頃だつた。それでも博士は快く迎へ入れて呉れた。剩つさへ家族一同で私を歡待してくれるのだつた。博士の家には夫人との間に一男四女があつた。一番かしらは長女のエレナ嬢で、十二才といふ愛くるしい盛りだつた。嬢はその兄弟の寫眞を私に贈つたりした。博士と私との會話は多く獨逸語であつた。夫人やエレナ嬢との話には、博士白らの通譯を煩はさねばならなかつた。ここに滞在したのは僅か三日に過ぎなかつたが、私は後

二度許り博士を訪ふのだつた。私がのち獨逸にある在る間、博士や、エレナ嬢は幾度となく手紙を送つて呉れた。故國に歸つて後も未だに音信を絶たれない。博士が時々私に贈られる著述の中には、いつも可憐なエレナ嬢の文字がなやかに書かれてある。今度貰つた短信にも、嬢はその言葉を添ふる事を忘れなかつた。不自由にして、而も只束の間の交りであつたのに、どうしてかほどまでに印象を残したものであらう。人の交り程世にも不思議なものはない。思ひはかくて伊太利會遊の日に歸る。

以上は某誌に私が書いたものであるが、外遊記の一斷片なのである。私がクロイチエ博士の名を聞いたのは久しいものであるが、その思想に觸れたのは、外遊前二三年の頃であつた。何でもサンタ・ヤナーがクロイチエの美學説に對する紹介批評であつた。そしてそれによつて、クロイチエが並々ならぬ思想家である事を知つた。後にその「論理學」を讀んで、愈々敬服措く處を知らなかつた。だから一度歐洲の地を踏んだならば、必ず伊太利に美術行脚の旅に就かうと思つてゐたし、又伊太利に行つたらば、必ずクロイチエ氏を訪はうと願つてゐた。その願ひは二つとも充たされたので、私の歐洲巡遊の目的の大半は充たされたといふ位ひにさへ思つてゐる。

兎も角斯くの如くにして、私はクロイチエ博士に接する事が出来て、その會見した度數は僅かに二三回に過ぎなかつたけれども、與へられた印象や感銘は到底筆紙に盡し難いものがある。その哲學は如何に整頓し、且つ深遠なものであるかは、彼の哲學體系とも云ふべき「純粹概念の學としての論理

學」や、「表現及び一般言語學としての美學」及び「實踐哲學」等にも充分窺はれるであらう。博士が又如何に學的良心に鋭くして堅忍不拔な人であるかと言ふ事は、ヘーゲルの全集をば、伊太利語に總べて移し植ゑたと言ふのでも知られるであらう。博士は是が爲に獨逸フライブルグ大學から名譽博士の稱號を贈られてゐる。又之に依つても如何に博士がヘーゲルの哲學に傾倒してゐるかも知られる。併し博士は單に、ヘーゲル哲學の紹介者でもなく、翻譯者たるにも止まらない。博士はよくヘーゲルの思想をば玩味し、咀嚼し、之を現代化する事を忘れなかつた。即ち「ヘーゲル哲學の長短」の一書は、ヘーゲル哲學に對する鋭き批評の作物である。兎も角之は博士が新ヘーゲル學徒たる事を雄辯に物語るものである。

以上述べたものだけでも容易ならぬ勞作であらう。處が博士の精神的活動は中々これに止まらない。その他政治に關する述作あり、歴史哲學に對する論究あり、或は世界大戰に對する哲學的反省がある。又、或る時には文藝復興の伊太利の哲學者ギアン・パツチスタ・ビコーの紹介論をなしたり、或は藝術論を試みたり、或は倫理の考察に移つたり、夫れは／＼方面が斷然廣い。かと思へばナポリに於ける劇場史を考へ、或は伊太利の文學を論じ、或はセークスピアやコルネーユ及びアリオストの比較研究を爲し、或はダンテを論じ、或はゲーテを評論する。と云つた風で、天馬空を行くが如く而も往く處として可ならざるはないのである。眞に千手觀音も斯くやと許りに思はれる。そして博士は

大戦の頃は文部大臣として活躍した。現に、伊太利政府の元老院の一員である。之によつてみれば、一かどの政治家でもある。政治家と言へば散漫であるかの様に思はれる。その多忙な生活に於て、以上の如き諸面の考察をなしてゐるのである。かく又取扱ふ問題が廣ければ、淺薄思想に流れるのが常であるが、勿論彼の議論は決して一評論家や、單なるジャーナリストのよくする處ではない。細心周到の哲學的反省が加へられてゐる。眞に彼は近代が生んだ天才と云つても過言ではあるまい。現代哲學者中その眼界、その視野の廣きものは、彼を以て最となさねばならぬと思ふ。而も尖き論理と、光彩陸離とも言ふべき文章と相まつて、人をひきつけねば已まぬものがある。

前にも書いた様に彼の邸宅は、トリニタ・マジョオレーに位して豪壯なる事、伽藍の様なものがある。家には某親王が嘗て住んでゐられたと云ふ話である。彼はこの大殿堂の中に、今は全くの閑日月を送つてゐる。私はその圖書室に案内されたが、凡そ十五坪許りの部屋が十室近くも連続してゐる。その各室には四方の壁に本がぎつしりと詰められてある。そしてこれは伊太利語の室、これはスベイン語の室、これはラテン語の室と云つた風に、大體は國語によつて區別されてゐた様である。ハイデルベルグの大學の哲學研究室なんかも、到底クローチエ一人の藏書に及ぶべくもなかつた。彼の該博なる知識、推して知るべきのみ。

斯う云ふ彼は一八六六年生れで當年六十四才の老齡ではあるが、老いて益々壯と言つた方で少しも我等青年と變る處はない。よく飲み、よく食ひ、よく談ずる方で少しも勿體ぶつた處がない。その平民的な態度その人間味溢るゝ態度には全く私は打たれて仕舞つた。

伊太利に於ける現代哲學の思想はその最高の表現として二人の思想家を見出すであらう。ベネデット・クローチエとギオバンニ・ゼンチールとが即ちそれである。その二人は殆んど總べての國民文化を支配すると言つていい。その二人の思想家のとれる方向は、最初には新ヘーゲル主義の様相をとるのであつた。つまり彼等は十九世紀における最終にして、最大なる哲學より出發した。と云ふのはクローチエとゼンチールはサンクチツシュの學派、殊にスパーベンターの學派より出發したので、ヘーゲル主義に近づいて行つたのだつた。夫れは、單にヘーゲルを復活しやうと云ふ目的から許りではなかつた。今一つには力強き近代文化的精神に刺戟せられ、更にヘーゲル哲學に對し、若々しい批判を下さうと云ふ要求が潜んでゐるのだつた。かくしてクローチエとゼンチールの二人は、ヘーゲル哲學の根本思想を受入れるのであつた。例へば、辯證的作用としての精神を考へやうとするのが夫れである。斯かる辯證的作用は、旋律的にその内容をば豊富にして行く。そして絶へず對立する矛盾となつて動いてゐるのである。而も精神は主觀であるが自ら客觀化する。そして自然の中に自ら没入して行く。かくて自然の本體となる。更に自分自らに歸つて來んが爲に、現象界の原理となるのである。

かく精神は創造的反省に於て、自ら反省する存在である。斯る反省はその精神の自身の展開に他ならない。又精神は自ら主張する處の實在である。精神は自ら否定するが故に、自ら主張するのである。又精神は疑ひより生れし確實性である。又誤謬を克服して生れし眞理なのである。惡の危機より脱せし善である。又無智の針が絶へず求むる聰明であり、叡智である。

かう云つた處に、ヘーゲル哲學の根本特徴は現はれて居るのであるが、それは伊太利の二人の思想家に、辯證法的リズムの生けるところを興へた。ヘーゲルは、即ち各の理想的實體や、或は各の絶對や、或はすべての無限や、或ひはすべての自由や、すべての神と言つた様なものをば、悉く夫等が内容空虚である場合には、之を否定する様に教へた。つまりヘーゲルによれば、内容が伴つてこそ實體であり、神であり、無限なのである。更に詳しく言へば有限をぬきにした無限はあり得ない。必然をぬきにした自由も無意味であらう。同様に又人間の精神を他にして、何處に神を求め得やうか、と斯う云ふのである。ヘーゲルは彼の後繼者に對し、又ヘーゲル自身に對して、戦ひを宣すべき武器を興ふるのであつた。と云ふのは、ヘーゲルは彼特有の哲學の根本思想に果して忠實であつたらうか。否、彼は彼の辯證法をば、藝術的構造となして、動きのとれないものにして仕舞ひはしなかつたらうか。つまり精神作用の純なる契機の代りに經驗的對象や、自然的産物や、或は歴史的な諸面の施設をば、互に相對立せしめたので、遂に動きのとれない頑くなものに爲しはしなかつたらうか。其處で若し

この辯證法の精神をば忠實に守らうとするならば、斯かる状態に於て、エンサイクロペデー(之を邦譯すれば「百科全書」と云ふのであるが、彼の哲學體系をよく示したる名著の一つである)と云つた様な言葉を放棄しなければなるまい。つまりヘーゲルが雜然混然と取入れた諸般の現象をば、解體して仕舞はなければなるまい。

夫れだからクロイチエは考ふるのであつた。ヘーゲルの誤謬は純なる思想と、經驗的なる思想との混合の中に存する。又他面に於ては、矛盾せる要素と單に對立せる要素とを、混同せしめし處に存すると考へるのであつた。それだからクロイチエは彼の考へよりして、經驗的概念の辯證を批難し、そして眞の固有なる辯證法をば、此の矛盾的對立の辯證法と(神と惡、眞と偽、有限と無限等)對立的な反對(美、眞、必要)との二つに分類した。ヘーゲルの原理は矛盾せる反對には妥當するのであつた。肯定的概念がその存在を持つのは、只その概念が否定的概念をば克服して、自身の中に又歸り來らしむる事によつてのみ成立つのである。では對立的な反對の特有なる點は、何處に存するのであるか。蓋し斯かる對立の各のものは他のものをば止揚しない。むしろ彼等は互ひに調和し合ふのである。見るべし、眞なるものは善なるものに對してよりも、他の關係に於て偽と相對するのである。美は哲學的眞理に對するよりも、他の關係に於て醜と對立するのである。「死なき生命」と「生命なき死」とは、互ひに相對立する處の眞ならざるもの(即ち不眞)である。處が斯かる不眞に對して對

立する眞理は、生命と死との結合を形造り、又自分自らとそしてその反對なものとを結びつける様な生命である。善なき眞理や、又眞理なき善は、之に反して何等眞理ならざるものと云ふ事は出来な。これ等は第三の概念に綜合統一する事が出来るであらう。眞と善とは異つてゐるが、而も互ひに統一せられる様な系列にもつて来て、解決が出来る様な表象が、斯くの如くして、存する事を知るであらう。

對立的反對の辯證法は、かくてクロイチエによれば、精神の段階なる表象に展開するのである。例へば直観と概念と云ふ二つの理論的段階、及び個人の欲と普遍的なる欲と云ふ二つの實踐的段階、こゝ云ふ風な概念の段階に展開するのである。それだからして精神の根本形式は、

A、藝術的

B、哲學的

C、經濟的

D、倫理的

の四つが即ち精神の根本形式なのである。そこで生命の過程は、自ら此等の形式が互に擁護しやうと云ふ事になる。つまりそれ等の關係は、統一と差別との關係である。即ち個人の特異性が自らは統一しないが、むしろ夫等の連帶に於て、他のものと共に維持存続し、而も實現する様なリズム(旋律)なのである。

斯くの如くクロイチエにとつては、精神は辯證法的に發展する作用である。それだから彼のみる處によればヘーゲルが考へたやうに、哲學とは即ち歴史であり、歴史は即ち哲學なのである。即ち彼は言ふのである。蓋し歴史は精神の歴史である。而も精神は價值である。眞に唯一の價值であり、我等が把握し得る唯一の價值である。されば歴史は常に價值の歴史である事は明白であらう。そして歴史を叙述せんとする意識に於ては、精神は自ら自己のために思想として明瞭になるのである。果してさうであるならば、歴史叙述の指導原理は、思想の價值であらう。それだから歴史叙述を規定する原理は、所謂 *Gefühlswort* (感情價值) であり得ない、何故と云つて *Gefühlswort* とは *Leben* (生命) であつて *Gedanke* (思想) ではない。單なる詩的傳記に變改せんとせば、我等は我等の愛や涙や尊敬の念を引込めねばならぬ。そしてそも如何なる成果行爲をもつて、社會的乃至は文化的事業にその個人が貢献したかを問ふべきである。國民の歴史、人類の歴史などについてももとより同様である。我等は *Gefühlswort* (感情的價值) を克服しなければならぬ。即ちそれを思想的價值に變改しなくてはならぬ。云々。かう云ふのが、彼の歴史哲學に對する考察の片鱗なのである。哲學は即ち歴史である、と彼は考へる。かく、只彼の歴史哲學の一斷想を窺ふに止めやう。

彼の著述としては枚擧に過ぎなき程であるが、その中より主なるものを擧げるならば、

- 一、「表現の學及び一般言語學としての美學」(一九〇〇年)
- 二、「純粹概念の學としての論理學」(一九〇五年)
- 三、「ヘーゲル哲學の長短」(一九〇七年)
- 四、「實踐哲學、經濟學と倫理學」(一九〇八年)
- 五、「歴史叙述の理論と歴史」(一九一三年)
- 六、「キアン・パツチスタ・ピコの哲學」(一九二三年)
- 七、「詩歌及び非詩」(一九二三年)

などであるが、之等は殆んど皆英、獨諸外國語に翻譯されて居るのである。私の手許にあるものみ
 にも二十種に近い。誠に旺なりと言ふべきではないか。

従つて彼に關する研究も少くない。

- 一、プレツツオリニ「ヘネデツト・クロイチエ」(一九〇九年)
- 二、チキチツチ「クロイチエの哲學」(一九一五年)
- 三、ウキルドン・カー「クロイチエの哲學」(一九一七年、倫敦發行)

などあるが、其他諸々の雜誌に發表されたものも少くない。我國では彼の著述の翻譯は二三部にすぎ
 ないし、況んやクロイチエ研究などの文献は殆んど見當らない。今少し我等は彼を理解しても良い。

VII 青年ヘーゲル學徒

1

私が伯林に足を入れたのは前後三回であつた。最初の折には只一夜を此處に過せしのみで南獨に向
 つた。再度の訪問の折には、美術行脚が目的であつたので、専ら諸々の美術館を歩いたり、夜は音樂
 會に出かけるのが仕事であつた。三度此處に訪れた折は、故國に歸らうとする途であつた。爲めに稍
 らのびやかな氣持でもあつたし、又もう之で異邦の生活が終るのかと云ふ強い未練もあつた。あれや
 これやで一種の低廻趣味から一日々々と延ばされるのであつた。それにシベリヤ經由の汽車で歸らう
 と云ふので、舟便をかけるのと違つて出發の時日を確定する必要もない氣樂さもあつた。

斯んなに自由にして氣樂な氣持ではあつたが、伯林大學で訪問し様と云ふ様な教授もなかつた。
 只法理學の方で名高いシュタンムラ教授にはある憧憬を持つてゐたが、その思想學說に充分の理解も
 なかつたから、敢て訪問する熱意も出なかつた。斯かる折、私をして門を叩かしたものが二人あ
 る。一人はマックス・デツソアーであり、今一人はゲーオグ・ラーソンである。

マックス・デツソアーの家は、私の宿から程遠からぬシュバイエレル街なので先づ氏を訪ねる事に
 した。その名を聞いたのは何でも私が大學にゐる頃、美學の講義で初めて耳にした事を覚えてゐる。

彼の名は併しむしろわが國では教育の方面でひろく知られてゐる様である。丁度私がハイデルベルグから出かけた折、彼の手になつて編纂された二つの著述を求め得た。一つは「哲學史教科書」であり、今一つは「哲學の諸部門」の二著である。前者は古代より近代に至るまで、各時代の哲學史をば夫々専門の哲學史家が執筆した物であり、後者は美學だの宗教哲學だのと云つた様な哲學の諸々の部分をば、夫々得意の人が筆を執つてゐる。デツソーアは單にその編纂者であるが、内容をみるとなかく確りしたものである。この二著に惹かされてつい訪問する氣になるのであつた。

然るに逢つて見ると、つまらない平凡な人間としか見えなかつた。「美學及び一般文化科學」誌の編輯者ではあるが、話は極めて平凡單調なもので、私の問ふた肝心の問題には一向觸れないで、地震はどうであつたかの、日本の風土氣候はどんなものなの、そう言つた位のものであつた。結局何の得る所もなく、失望の裡に空しく宿に歸つて來た。それに引き替へフリードリツヒバインにゲーオグ・ライソン氏を訪ふて、私のかの失望はすっかり癒されるのであつた。彼は聖バルトロモイス教會の牧師であるが、電話を以つて訪問していゝかと問合せると、快く之を承諾して呉れた。牧師と言へば日本では、大抵自信がなさそうで、榮養不良の面持をしてゐるのが常である。所がライソン氏は仲々そんなものではない。其堂々たる體軀、その炯々たる眼光、百雷一時に落つるが如き大音聲、總ての構えが人を壓せねば止まぬ様な風格である。一八六二年生れと言ふから今六十三といふいゝ年輩である。牧師としては全く格好の年輩であるし、人物として以上の風貌で知られるやうに、仲々凡庸の人でない。

氏が學界に其名を現はしたのはヘーゲル全集の編輯者としてである。私が彼を訪ねたのも、ヘーゲル研究の一學徒として止み難き要求からであつた。其他宗教や藝術に關する度々の著述はあるが、何としてもヘーゲル全集の編輯は、彼の學界へ寄與した最大の貢獻と言はねばならない。元來彼はヘーゲル學徒としては親譲りのヘーゲル學徒であつた。即ち彼の父アドロフ・ライソンは、法理哲學方面に於てヘーゲルより多大の影響をうけた人である。歴史法理學者として名高いコーラーと共に十九世紀末の頃盛んに氣を擧げたものである。だからして彼の名は神學方面でヘーゲルの流を汲むビーダーマンや、オットウ・ブッライデラと共に忘るべからざる人である。さればゲーオグ、ライソンのヘーゲル全集の編輯は、結局親の遺業を繼いだものに他ならない。

遺に親譲りだけあつて、私が訪ねた折にはライソンはヘーゲル全集の初版再版など、總ての種類的全集を見せて呉れた。そして又ヘーゲルの幼年時代からの種々な寫眞を見せる事を忘れなかつた。彼はヘーゲルに就いて色々な物語を交へながら、私に二つの問題を與へた。といふのは、

- 一、日本に於けるキリスト新敎の位置如何。
- 二、ヘーゲルの哲學と日本思想界の關係如何。

と云ふ問題であつた。之は仲々容易ならぬ問題であつて、速答出來得べき筋でもなかつたので、書いて送ろうといふ約束をする外はなかつた。是等の問答によつても、デツソアー氏の地震の拶挨など、事變り成程思想家であり、學徒である事を肯かきしめる。

2

所でヘーゲルの全集であるが、ヘーゲルは彼が一八〇七年の頃エーナ大學に講師たる頃、名高い「精神現象論」を著した。之に依つて彼は漸やく學界に認められるに至つた。そして一八一九年ベルリン大學に教授となるに及んで、彼の勢力は大したものであつた。其の講義の際には、滿堂立錫の餘地さへなかつたと言傳へられてゐる。斯様にして全獨逸の思想界を風靡するに至つた。併し何時迄も此の盛況は續く事は出來なかつた。彼歿した後、彼の學派は左右兩黨の二派に分れた。そして自然科學勃興と提携して、唯物論的なる左黨の勝利となつた。従つてヘーゲルの哲學は漸く凋落し初めた。殆んど彼の著述は省みられない様に迄なつた。オットー・リープマン等に依てカントに歸れの叫び聲が盛んになる頃、彼の著述はわづかに古本屋のさらしになるに過ぎなかつた。處が榮枯盛衰は世の常である。學界も亦この例にもれることは出來ない。が今日に至つて又思想界は漸く新カント學派には秋が來たやうに思はれる。そしてヘーゲルに行かうとする氣運が動いて居る。かゝる折ラーソンのヘーゲル全集編輯の業は、決して無意味なものとは云はれない。

即ち一九世紀末葉頃迄には斯様に安直に、且つ容易にその全集の古本を手に入れる事が出來たが、現在では殆んどそれは不可能となつてゐる。數百金を出しても、仲々購ふ事は難いのである。今日のところ我等が手に入れ得るヘーゲル全集は、凡そ三種類程數へる事が出来る。第一にはポーランド版である。ポーランドと云ふのは和蘭のライデン大學の教授であるが、彼の編輯にかゝるヘーゲル全集である。之は一九〇二年ヘーゲルの法理哲學出版以來、引續いて出版されたものであるが、此の全集では、

- 一、法理哲學（一九〇二年）
- 二、哲學百科全書（一九〇六年）
- 三、精神現象論（一九〇七年）
- 四、哲學史（一九〇八年）
- 五、宗教哲學（出版年不詳）

の五種だけ出版されてゐる。次に記すべきは、グロツクナー氏の編輯にかゝるものである。全體で二十卷の大部なものであるが、この全集の特徴とする所は、右に擧げた外尙「書簡集」を包含する事である。一昨年公になされて今將に完結しやうとしてゐる。第三に擧ぐべきは、ゲーオグ・ラーソンの編輯にかゝるものであつて、これは之迄も廣く知られてゐる。一九二〇年から出版されてゐるフ

エリクス・マイナーの「哲學叢書」の中に出てゐる。すでに十五卷を重ねてゐる。此の版の特色としては一八〇七年ヘーゲルの精神現象論以前の作物たる、政治及び法律の哲學論文が収録されてゐる事である。ポーランド版にも詳細な編輯者の序文が伏せられてゐるが、勿論ライオン版にも各冊に之を忘れられてはゐない。その序文は、我等にとつてヘーゲル哲學に對するよき手引として役立つであらう。夫等のライソンの序文のうちで、殊にライソンが力を注いでゐるのは、「歴史哲學者としてのヘーゲル」なる一編であらう。之は全集中の「歴史哲學」の著述の巻頭にのせられたものである。之によつて、しばらく彼の學說を覗ふ事にしやう。ライソンによれば、ヘーゲル自身に取つては歴史的事實は他の色々の對象と並んで、任意なる思惟反省の對象ではなかつた。且又歴史の哲學は他の同じ様な類の哲學者の對象でもなかつたのである。否歴史的事實は、その反省の主要なる對象を形造るのであつた。眞に歴史哲學は彼の哲學的方法の出發點であり、又目的なのであつた。哲學家エドワード・エルドマンはヘーゲルを評して汎論主義と云つた位であるから、如何にヘーゲルの哲學的構相が論理的であつたかは推し考へられやう。にも關はらず、ライソンの見る處によれば、ヘーゲルに於ては論理學や哲學大系を作らんとする以前にヘーゲルは歴史哲學者であつた。此の點について我々は全然ライソンの見解に同ぜざるを得ない。眞に歴史の世界はヘーゲル固有のテーマであつた。彼の精神現象論を一寸でも覗いてみるがいゝ。さすれば彼の思想生活に於て、歴史的興味が如何に重要なものであつたか、と云ふ事をうかゞひ得るであらう、など、彼は説くのである。觀じさり觀じ來つて、我々はライソンを以て、極めてよきヘーゲルの理解者であつたと云ふ事が出来る。然るにライソンはヘーゲルの歴史哲學に對して三つの批難を擧げてゐる。曰く、

一、ヘーゲルが極めて少數なる民族をば前後に繼續せしめて、そしてもつて之をば世界史と名付けた。斯くの如くにしてヘーゲルは他の國家を省みなかつた。之は確かに氣隨と云はなければならぬ。

二、ヘーゲルは世界と云ふ事に於て全國家の歴史と云ふ事を考へた、而も人間精神のすべての領域に於ては、夫々それ特有の歴史があるではないか、と云ふ批難もあらう。

三、彼は歴史過程の區分に際して、辯證法的進歩に對する先驗的な理念を持つて來たので、その爲めに事實をば、ある型にはめて仕舞つたではないか。

そこで此のライソンの説を検討する爲めに、一應ヘーゲルの歴史哲學の體系を顧みておく必要がある。ライソンの編輯によれば、ヘーゲルの歴史哲學を二部に分けた。即ち

第一部、歴史に於ける理性

第二部、世界歴史

となしてゐるが、第一部は即ち歴史に對する哲學的反省の部門であつて、之が現今用ひられてゐる歴

史、哲學の謂である。第二部に於ては、エチプトやアツシリアやバビロンや支那、印度などの歴史を叙してゐる。今日の所謂經驗的歴史學の部門である。斯う云ふ風に云つて來れば、ライソンの批評の眞意が那邊にあるかを窺ふ事が出來やう。之に對して細かくこれと云ふ必要はないが、ライソンの批評にはクロイチエの如き鋭き批判はない。クロイチエに於ては既に前に述べた如く、ヘーゲルの辯證法に對する尖鋭なる批評は、眞に驚歎に値するものがあつた。然し我等はライソンに於て、斯かる要素を發見する事は出來ない。

3

さもあらばあれ、ライソンは忠實に且つ熱心にヘーゲルの哲學をば、現代に生かそうとする思想家である事に就いて疑ひはない。で、クロイチエ等と共に、彼をもつて新ヘーゲル學徒と、名付ける事には何の異議もないであらう。ヴキンドルバンドはブレルシエン(拙譯「哲學の根本問題」)の下卷に於て「ヘーゲル哲學の改新」なる一章を費してゐる。この論文などはヘーゲル復興運動の一つの現はれであるとも見られやう。併しヴキンドルバンドのヘーゲルに對する理解は、決して深いものではなかつた。所詮彼はカント學徒たるを出でゝゐない。カントの忠實な祖述者である以上、ヘーゲル學徒である事は甚だ難い。蓋しその考へ方に於て根本的な相違がある以上、之れは致し方ない。

然るに今この新ヘーゲル學徒に對して、青年ヘーゲル學派と稱する一團の學徒ある事を忘れてはならない。即リツカード・クロイチエ及びヘルマン・グロツクナー等の少壯思想家が即ちそれである。クロイチエは嘗てフライブル大學に於て、員外教授の職にあつたが、今は何でもドレスデン邊りの高等學校の校長だかの職にあるやに聞いている。哲學雜誌「ロゴス」の編輯者の一人として知られてゐる。「カントよりヘーゲル」なる上下二卷の大部の著書を公にしてその立場を明かにした。

ヘルマン・グロツクナーはハイデルベルグ大學に於て目下講師の任にある。私は在獨中その講義に列した事は、一、二回にすぎないけれど、私宅教師として毎週二回、ヘーゲルの研究をやつて貰つた。元々リツカート教授の門下生なので、教授の住宅の屋根裏に住みバンをかぢり乍ら研究にいそしんでゐた。そうした彼の風貌を未だに忘れる事が出來ない。日本でも學者にならうとするのはなまなかな苦勞ではないが、獨逸に於ける學徒の苦辛も殆んど日本では想像が出來ない位である。大學を出で、最優秀な者のみが、助手に選ばれ五年や十年その職に甘んじなければならぬ。それでやつと私講師に擧げられる。それでも一文の俸給も支給せられる事はない。だからあつち此方の家庭教師を務めるのである。我國では原稿生活で之を補ふ事が出來るが、ジャーナリズムが日本の如く露骨に極端でない爲めに、原稿料など先づあてにならない。かくて先生の屋根裏でバンと水の生活に甘んじなければならぬと云ふ譯だ。カントにしてもあの才分を抱き乍ら四十五歳の頃迄は私講師としての貧苦と

闘はなければならなかつた。我がグロツクナー氏も亦此の例にもれる事は出来ないのである。それを思へば私などの學才を以て、兎も角も生活だけには何の不安もないことは眞に恵まれたものだと思つて感謝せざるを得ない。それだけ人間が御芽出度いし、日本の學界がまだ幼稚なのではなからうか、顧みて恥しい氣持さへ起るのである。

處でこのグロツクナー氏は先にも記した様にヘーゲル全集の初版復刻によつて、大いに名を擧げて來た。然るに之より先、彼は「ハイデルベルグ哲學論文集」に於て「ヘーゲル哲學に於ける概念」なる著述によつても、彼の思想傾向や立場は明かである。然らば是等の青年ヘーゲルの述作に重心を置かうとするのである。つまりこの時期に於ける宗教性や非合理性の考へを力説しやうと云ふのである。由來生命は神秘である。非合理性である。然るにカント流の新論理主義の哲學によれば、之等の問題は内容の問題であるとなして、哲學の以て問ふ可からざる問題として敢て之を考へない。之れに就ては既に論じておいた。併し哲學は只形式だけを取扱ふものであれば、極めて明瞭であり、且簡單であらう。神秘にして非合理なる具體的の生命をば、如何にみるかと云ふ爲に肝心の問題があるのではないか。此處に新カント學派の凋落の素因がある。すでに新カント派には秋の木の葉が落ちた。其處に青年ヘーゲル學徒の聞くべき天地がある。私は此の意味に於てクローナ氏やグロツクナー氏の健在を祈つて止まない。

IV マルキシズムとヘーゲル哲學

1

ちやうど明治節の當日であつた。私は子供を携へて、程近き明治神宮に参拜した。遠くもないのでほんの散歩の積りで、極く手輕るに出掛けたものだが、どうであらう。盛裝した老若男女の参詣人での附近は埋つて居るのである。信濃町口や青山口の神宮外苑から、参拜道路を経て正門に達するまで、全く文字通り人の垣である。新聞では百萬とか、二百萬とか、報導されて居たが、それに偽りはなかつた。全く我が國はこんなに忠良なる臣民を以つて満たされてゐるのかと思はせた。この調子ならさゞれ石の巖となるまで、安泰無事だと思はざるを得なかつた。

だが、これに止まるならば問題はないのだが、他方には物凄い暴風が渦巻いてゐる事を勿論見逃されない。例へば近く龜井戸の洋モスの暴動の如き、或ひは〇〇工場の労働爭議の如き、何を語るか。また頻々と起るあの學校騒動を何と見るべきであらうか。學校騒動と言へば、殆ど我國の名物となつてゐる位である。學校當局に向つて學生が團體の力を以つて、月謝三割値下げの要求をなすなど眞に沙汰の限りではないか。師弟の道も情誼もあつたものではない。之に依つて見ても如何に青年學生の

思想が尖鋭化してゐるかといふ事が分らう。學生全部が必ずしもそんな尖鋭的になつてゐるといふのではないにしても、職業的の煽動家が全國に横行してゐるといふのだから、愈々事件は面倒である。何にしても、恐ろしい世の中になつて來たものだ、只我等は眉をひそめるのみである。

かゝる著しき對立は何を示すか。傳統の國家思想と左翼運動との對立より外はない。何れの國何れの時代に於いても、新らしきものと古きものとの戦ひは止むを得ない。然し我國の刻下程、其峻烈なる對立を見るのは、恐らくは稀れであらう。マルキシズムが斯くの如くにして、只單なるチャーナリズムに終らず次第に實踐に移つて居る事も、看過出來ないのである。されば其思想の、善惡は別問題として、將來の指導的位置に立つべき思想に就て思ひ及ぶ場合に、我等はマルキシズムを抜きにしては考へ得まい。それだから之について正しき理解を持つといふ事は、むしろ我等當然の義務でなければならぬ。

さればこそ私はマルクスに就いても回を重ねて述べる所があつた。もとより限られたる紙數を以つて遺憾なきを得るのは仲々に難い。最早筆を納めるのも近いので。斷片的にでも、私の立場よりマルクスの思想に對する清算を試みねばならぬと思ふ。

古典派の經濟學說に於ては、生産を考へるにしても、只特定個人の生産として之を考へるのである。然るにマルクスに依れば、社會全體の有機的生産としての生産を見る事を忘れなかつた。又社會的發展過程の形相に於いて、之を考察するのを忘れなかつた。この考へ方には非常に優れた特徴が存する。よしやそんな考へは、ヘーゲルの歴史哲學的考察に由來するとは言ひながら、我が國の一般思想界に之を導入した者はマルキシストであつた。之は彼等の大いなる功績として認めざるを得ない。更に又、彼等は我々に資本主義に對する反省を促がして呉れた。マルキシストをまたすとも我等は資本主義の不合理さを忘れる事が出來ない。如何に多くの人が働けど働けど食へないで居る事か。而も他方には、懷手に左うちわといふ格好で、享樂生活に日も足らない人がゐる。今迄はこんな矛盾に對して不思議の念を起しながらも、興へられたる定業であり、運命であるとして諦めてゐた。然し、時代の感覺は之を單なる宿命として見逃がす事は出來なくなつた。労働者の自覺、無産者の擡頭、之は最近數年に於ける我が社會の大いなる現象でなければならぬ。それで、よしや社會主義者の要求するが如き制度組織が、直ちに實現されなくても、資本家や特權階級はいつまでも、うましき夢路を辿る事は出來なくなつた。労働組合法が論議せられ、工場法が考へられる。といふ様になつて來たのは、全く社會主義者の刺戟に依つたものである。彼等の無遠慮な資本主義に對する抗争は、時代の感覺に反省を促がした。こゝに又彼等の偉大なる功績を認めなければならぬ。

とは言へ、斯ういふ事はマルキシズムを全部承認する意味でもなければ、社會主義に同じなければならぬといふのでもない。今少しく其思想の分析を試みなければならぬ。彼等に依れば、資本は本來の性質として増加の傾向を有する。そしてこの増加は蓄積と集中の二つの形態で行はれる。でこの過程に於いて社會は二つの階級へ分割される。一方無産者階級は、資本主義の犠牲となつた資本家などの加入によつて、膨脹増加し、人口過剰となる。他方有産階級は益々其數を減ずる。

しかのみならず、資本主義の正常的な作用が、恐慌といふ機制によつて増進される。蓋し恐慌は、右にのべた諸々の結果を益々深化せしめるからである。然るに、無産階級と有産者との社會階級が分割される。そして其分割は、正常の状態並びに異常の状態に於ける資本主義の有機的法則をなすものである。この二つの階級の闘争は、必然に無産階級の勝利となり、○○○○諸階級の廢止となる。

マルキシストが資本主義は夫自體矛盾を有するといふのは即此の點である。詳しく言ふならば、資本主義は其本來の性質に従つて益々資本の増大と蓄積とを計つて行く。其結果、産業豫備軍の増加とはなり、無産者の増大となる。遂ひには階級の闘争を來し、無産者の勝利となる。資本家は斃れ、資本主義は崩壊する。資本主義に於ける矛盾といふのは即ちこれである。こゝに我々はヘーゲルの辯證法的の考へ方を見出すであらう。

等しく辯證法的考察を執る點に於いて、ヘーゲルもマルクスも同一である。然るに、ヘーゲルの辯

證法は飽く迄も觀念的であり、マルクスのそれは唯物辯證法と言はれる。それは何によつて然るか。ヘーゲルに依れば、すべて歴史の發展變化を規定するものは觀念であるとなす。然るにマルクスに依れば、かゝる變化を規定するものは、物質であるとなす。即ち唯物辯證法と稱せられる所以である。

3

又マルクスに依れば、生産物の交換價值は其生産のために社會的に必要なる労働の量に依つて測定される。労働者の労働力を購ふ資本家は、労働者に支拂ふのに此の労働力の交換價值を以つてするのである。而して此の労働力の交換價值は、此の労働者の生活必需品及び彼の家族のその生産のために社會的に必要なる労働量に依つて測定される。他面此の労働力は特定の一生産物中に固定され合體される。然るに此の生産物の交換價值は、之を生産するために社會的に必要なる労働量によつて測定される。

一方労働者及び其家族の生活必需品と、他方結晶せる労働力を表はすものとしての生産物との生産のために、社會的に必要なる労働量によつて決定される。此の二個の交換價值の差が餘剩價值を構成する。資本は餘剩價值を生み、而して又逆に、餘剩價值は資本を生む。此の資本は又新餘剩價值を生む。されば餘剩價值は餘剩價值其者の發生者である。即ち餘剩價值は餘剩價值を生み、資本から資本

が生れる。之が即ち彼の交換價值説であり、餘剩價值説である。是を以つて彼の靜的方面の學説とすべくんば、今一つは、動的性質のものである。それは言ふまでもなく、先きにのべた階級闘争に關する理論である。價值學説は暫らく措いて、今我々が問題にするのは彼の階級闘争の理論である。

彼によれば、社會の諸現象の基礎をなすものは經濟生活であつて、經濟生活こそは社會に於ける下層の構造をなし、政治、宗教、學問等は上部建築をなすものであるといふ。そして、觀念を以つて支配するとなすヘーゲルの辯證法は逆立するものだと言つてゐる。然るに彼は前にも述べたやうに物質が規定すると言つてゐるのであるが、此の説は彼は事實より出發するといふ。然るに彼が事實といひ、物質だと稱するものは、畢竟認識論的に言へば素朴的實在論を出でない。勿論彼の學説は唯物史觀であつて、形而上學的の唯物論とは違ふ。然しながら、彼が事實に出發すると稱し、物質を固執する以上は、認識論から言へば素朴的實在論を出で得ない。之ではまるで哲學的の素養を缺いた常識論に外ならない。斯様な考へ方が哲學史上如何なる地位を占めるものであるかは哲學史を少しでも覗いた人は容易に納得出来るのである。此の意味に於いて彼は全然哲學的洗禮さへも受けて居ないと言はれても仕方がない。これであるがヘーゲルの辯證法などまことに生意氣千萬の話である。如何にしてヘーゲルの辯證法が生れたか。ヘーゲルの辯證法はフキヒテの辯證法的考へに由來する。否、其徹底深化である。ヘーゲルの學説は又カントの認識論的考察に基づいてゐる。カントの認識論によつ

て素朴的實在論は充分克服せられたのだ。今更之を持ち出すまでもない話である。それに何ぞや、ヘーゲルの辯證法を以つて「逆立」などは認識不足も甚だしい。

4

歴史哲學に於いて中心問題をなすものは

1、史學方法論

2、歴史理念論

である。前者は史學の方法論であり、別言すれば歴史學の論理的性質を究めるものである。更に詳しく言ふならば、歴史の認識は如何にして可能なりや、と問はんとするのである。然るに、歴史の理念論に於いては、歴史の理念は何であるか。人間が營々として働き、行を進めてゐるのは、單に蜂蟻の業とは異なるであらう。そこに何等かの意味がなくてはなるまい。何等かの目標がある筈である。斯ういふ風にして何等かのメドを求めて走る彼等の目標こそ、理念なのである。だから理念は歴史を動かす力である。否、人類歴史生活の始めであり、終りである。歴史に於ける理念とは右に述べたやうにも考へられるのであるが、更に突込んで言ふならば、それは歴史をして可能ならしめる根據だと言はねばなるまい。蓋し之なくんば歴史は成り立たないのである。

考へて見るがよい。歴史現象といふのは一口に言つて見ても無數に存するであらう。只一日の人類の生活だけを考へて見ても、殆ど數限りもない歴史生活が營まれてゐる。之を僅かに人類始まつて以來五千年の過去から現在に至るまでを考へて見ても、宇宙の宏大無邊なるのと比して、優るとも劣るものではないであらう。之は所謂歴史以前の歴史である。有史以前といふ事は、只五千年以前と云ふやうな、時間的の過去に限られてゐるものではない。即ち、歴史以前の歴史といふのは「未だ書かれない歴史である。我等によつて認識されない歴史生活である。で、我々が歴史と稱ぶ歴史は「書かれたる歴史」を意味する。書かれない歴史はあり得ない。歴史がかくの如く書かれんが爲には、書かれな歴史以前の歴史より認識されなければならない。否選擇されなければならない。それでこの選擇せんが爲には、こゝに選擇の原理がなくてはならない。この選擇の原理あつてこそ歴史は成り立つ。かゝる選擇の標準をば、ヴェンデルバンドやリツカートは文化價值だと言つた。然し、私はヘーゲルにならつて、之こそ歴史の理念だと呼びたい。で、こゝに歴史をして可能ならしめるものは、史家の思想である。それだから私はクロイチエと共に「思想なき所に歴史なし」と言ひたい。で此の思想あつてこそ歴史はある。ヘーゲルは歴史の理念をば「人間の自覺」だと言つた。結局歴史は史家の人間精神に對する反省である。或ひは人類が人類に對する認識である。されば、其中心を以つて自覺だといふのは正しきを得て居やう。かゝる自己反省は、結局歴史に於いては人類が又己れ自身に還つて行く

事であり、己れ自身の内容を深める事なのである。だから歴史に於ける發展といふのは、只空間的擴がりを意味するものではない。内面的の深化である。内容の豊富さを増す事である。かゝる發展の過程がヘーゲルに依れば辯證法的なのである。だから辯證法はヘーゲルに於ては歴史發展の過程でもあり、又思想發展秩序段階でもあり、又同時に歴史認識の方法でもある。かゝる意味に於いて觀念的に辯證法を理解するより外に途はない。唯物的に辯證法を取るのには、只屍を以つて人間となすと一般である。無理解なる事も甚だしいと言はねばならない。

マルクスは歴史の發展變化を規定するものは物質だといふ。否、經濟だといふ。即ちそれは資本であり、金錢である。この金錢や資本が歴史生活を規定するものだといふ。然るに金錢は果して彼が言ふが如く物質であらうか。金錢をして金錢たらしめるものは何だろうか。それは我々の觀念ではないか。否我々が金錢だと認識しなかつたならば、金錢は金錢たり得ない。例へば日本の紙幣は外國に行つては流通しない。金錢として認められる所のみ効力は存する。只金錢といふのは我々の觀念の具象化に外ならない。然し斯ういふ事はバークレーの獨我論といふ傾向がないでもないであらう。

更に又考へて見ると、歴史規定の力をば金錢だ經濟だといふのは、畢竟彼等が歴史生活統一の原理としたものではないか。彼等は事實から出發すると言つてゐる。然し乍ら、無數の歴史の事實より事實を抽象するためには、そこに統一の原理がなければならぬ。所謂選擇の原理がなければならぬ。

この統一の原理として採用されたものが、彼等にあつては經濟であり物質であつた。即ち、物質といひ資本といふのは、名目の問題であつて、決して物質其者ではなかつた。即ち物質や資本が彼等の指導原理をなしたものである。かくて、唯物史觀は其根柢に觀念論に立脚してゐる事を知るであらう。我等はこういふ所に唯物論の論理的矛盾を見出さざるを得ない。

資本主義制度は夫自體矛盾を有してゐる。それだからやがて崩壊する運命にある。之はマルクスの言ふ所に無條件に同ぜざるを得ない。でも夫は必ずしもマルクスの創見だとは言はれまい。何故と言つてヘーゲルに依れば、生とし生けるものは凡て矛盾を持つてゐる。生命といふ現象の中には、死といふものが刻々と生命を蝕んでゐる。されば資本主義制度としても、此の運命を免れる事は出来ない。左翼の人達はインテリゲンチアの没落といふが、之とて詮するに同じ運命にある。成程右にのべたやうに資本主義制度は夫自體矛盾を持つてゐる。崩壊すべき約束にある。だからと言つて今直ちに是をば暴力を以つて破壊しなければならぬと彼等は言ふのであるが、之は如何なる指導原理によるか私には解らない。人間は生きてゐる。同時に一日々々と死に近づいてゐる。だと言つて殺せといふ理論は成り立つまい。

かく言ふ事は資本主義制度を破壊してはならぬといふのではない。又是を擁護しなければならぬといふ意味でも勿論あり得ない。只之を進んで破壊せよといふマルキシストの理論的根據が薄弱であるといふまでである。

時代は刻々に移り、テンポは早い。階級意識は尖鋭となる。これならば私達はどうしたらよろしいか。唯物論に味方するか。それとも敵となるか。二者の中一つしかあり得ない。その如く資本主義に對しては敵するか、味方するかの外ないであらう。私は無論唯物史觀の難點に顧みて、之に同ずる事は出来ない。觀念論的立場を固守して、唯物論と戦ふの外はない。むしろ我が思想界のために唯物論への抗争を続けるのが私の使命であるとすら考へる。然るにかく唯物論に敵する事は資本主義に味方する事とは言はれないだらう。觀念論にしても、唯物論の指摘するが如き資本主義夫自體に於ける矛盾は認めざるを得ない。私達は觀念論の立場に立つて資本主義を批評する事を忘れてはならないと思ふ。

かく言ふ事は左翼の人達にとつては、餘りにも生ぬるくも見えやうし、又没落し行くインテリゲンチヤの悲哀だとも言ふであらう。然し何と言はれても仕方がない。粗放散漫の唯物論に味方することは、眞理を求めんとする學徒の名譽にかけて出来ない相談である。蓋し眞理は流行ではなく、又デヤナリズムではないから。

まだ云ひ度い事も多々ある。書かねばならぬ事も少くないやうだ。併しこの節は一先づ筆を擱か

X マルクス主義の克服

1

マルクスの學說と云へば、河上肇博士を直に思ひ起すほど、同博士はマルキシズムに因縁が深い。あだかもその草分けでもあるかのやうに思はれる。ところが京都帝大の教授藤井建治郎博士は、明治三十年代に既にその紹介につとめられたとの事である。藤井博士はつひ最近になつて長逝されたが、私は學窓に在る頃倫理學の講義を受けた許りでなく、親しく御指導を乞ふたものであつた。余り講義が長いので、「もうよして下さい、」など、悲鳴をあげたり、怒鳴つたりしたものだつた。かと思ふと七面倒な質問をもち込んで、先生を困らした事も一再ではなかつた。思へばその先生もついに亡し。まことに哀惜の念も深い。

と云つて悲しき思ひのつるまゝに、先生をこゝに持出した譯でもない。昨年十月だかの雑誌『祖國』に、同博士が『唯物史觀の要旨』を執筆されたさうな。その中に於いて『生産關係が生産力の桎梏に轉化する』と云ふべきところを『生産力の桎梏中に在る生産關係が激變する』と云つた風に譯出されたと云ふのである。之に對して河上氏は

『大森義太郎君は「讀賣」で之を誤譯として指摘されて居たが、私はさうは思はない。日本では最も古くから、唯物史觀の考察に着手されて居り、獨逸語には特に堪能である藤井博士が、かゝる周知のものをば、今頃誤譯される筈はあるまい。之は何かの魔がさしたのに相違ないのである。ひそかに考ふるに、全國に於ける有名無名の多數の教授達から文部省に集つて來る諸論文も、恐らく皆このやうに魔のさしたものの許りであらう。』(河上博士『第二貧乏物語』一九九頁)

之に依つて觀れば、藤井博士は知つて居ながら態々筆をまげられたやうに思はれるのである。果してさうなのであらうか。

譯の誤りは知的问题である。然るに故意に筆を枉げる事は道德上の問題である。いやしくも倫理學者の面目と責任にかけても、それは想像出來ない事ではないか。殊に右の譯文のすぐ次に來るのは『かくて社會的革命的時代の出現する』と云ふやうな、極めて素人の目には露骨な文章である。始めから成心あつての仕事ならば、この方の文章をかき改めた方が、はるかに効果的ではないか。すでにこのあとの文章を右のやうに書く以上は、右に河上博士が指摘されたところは大した事ではない。之を取上げてその心中にまで立入つて、魔がさしたの誤魔化しだのと云ふのは、新聞の雜文記者なら兎も角、紳士的態度とも思はれない。凡そ翻譯と云ふものは、經驗のある人には分ることだが、誤譯を指摘しやうと思へばいくらでも擧げられるものなのだ。いくら誤譯しても良いと云ふのでは勿論な

いが、右の譯文はケーヤレスミスと云ふ程のものだ。それなのにこんなまでして憶測を逞しくするのが抑もマルキシストのイデオロギーであらうか。忠實なる學徒であり、氣高い人格者であられた藤井博士のために、一言私は辯ぜざるを得ないものがある。

2

河上博士はかくて『總じて効果的な批判は、批判さるべき對象の完全なる理解の上に立脚せねばならぬ』と主張される。まさに其通りである。批判が完全なる理解を基礎とすべきやうに、叙述紹介も亦かくの如き用意のもとになされねばならぬ。夫は、言ふまでもあるまい。マルキシズムの旗の下に立たれ、その思想に對し熱心忠實なる宣傳紹介者を以て自他共に許される河上博士には、それならば『完全なる理解』があるであらうか。私は深い疑をもつものである。

それならばその疑は何處に存するか。之迄の私の論述や物語りに依つても知られるやうに、マルクスの學說に於ける中心をなすものは唯物史觀に存する。唯物史觀の根基をなすものは唯物論的辯證法である。然るにこの辯證法の説明のために、河上博士はいとも得意に京大醫學部教授足立(文太郎)博士の人類學的研究をば、例證として擧げられたのである。そして『東京人類學雜誌』第四十三卷第八號を長々と引用される。足立博士は過去三十年の實驗の結果を列擧して最後に結論される。曰く

『西洋人は自分の體に、他人種よりも劣等な場所があると云ふ事を知らなかつた。然るに吾々は、日本人の軟部研究に依つて、彼等の體において諸所に劣等の點あることを見つけた。彼等の間には、最初大部不思議に思つた連中が多かつた。今日でもなほ不思議に思つて居る人がないでもないが、しかし近來は彼等も大部悟つて來た。元來西洋の學者は、甲人種が乙人種よりも總ての點に於て優り、あるひは總ての點に於て劣ると考へて居た。しかし之は彼等の誤りである。現に先きに述べた長掌筋と長蹠筋とは同様の性質のもので、共に人類には漸次消滅すべき筋であるにも拘らず、長掌筋から云へば日本人が劣り、長蹠筋から云へば西洋人が劣つて居る。これらの適切なる例を見て、彼等も今日では、ある點は甲人種に、ある點は乙人種に、あるひは優りあるひは劣ると云ふことを知るに至つた』(河上博士『第二貧乏物語』五八一—五九頁中引用)

之が河上博士によれば『しかも博士はかゝる研究に依り辯證法的論理の正しきことを無意識的に證明』(同頁)されて居るのださうな。かやうに河上博士の見る處では『日本人は西洋人に優つて居り且つ劣つて居ると云ふ一個の命題は、それ自身のうちに矛盾を含んで居る』(同頁)と云ふのである。然るにもとゞ辯證法は矛盾の論理である。右の命題はかやうに矛盾をもつて居る。だから立派な辯證法の考察だと河上博士は大見得をきらられる。この例は餘程博士の氣に入つたと見えて、何回も引用されて居る。こゝに至つて、博士のマルクス理解もあやしいものだと言はざるを得ない。

河上博士にしても、辯證法が矛盾の論理であると云ふ事だけは、つきりして居るやうだ。いかにも矛盾の論理である。だからと云つて、どんな形態の矛盾でも持つて來られては困る。同じ矛盾と云つても、ルツソーの指摘する矛盾とヘーゲルに於る矛盾とは異なる。ルツソーに於る矛盾は相反する二つのもの、對立であつた。例へば文明に於て知的生活が進歩すればする程、道德生活は退歩する。かやうな姿をばルツソーは矛盾だと呼んだ。ところがヘーゲルに在つては、概念はそれ自身を否定する概念をもつて居る。即ち直接性の否定である。例へば生命は生命自身のなかに生命を否定する死を包蔵して居る。之が彼に於ける矛盾であつた。エンゲルスが好んで引用する麥粒の例（本書「マルクスの學說」中「マルクス」の唯物史觀參照）を見れば、この點に於て彼はまことによくヘーゲルの眞意をつかんで居た。

足立博士の人類學の研究結果と云ふのは、日本人に於て長蹠筋と長掌筋との發達如何と云ふだけのものであつて、何ももの、その者の否定ではない。辯證法の論理は矛盾の論理である。矛盾の論理であると共に、否定の論理である。否定の論理であると共に、又發展の論理である、矛盾がある故に否定があり、否定がある故に發展があるのだ。見るべし、かの長蹠筋と長掌筋との比較より何の發展があると云ふのだ。かゝる次第はマルクス及びエンゲルスの著作を忠實に讀まれた筈の河上博士にどうして分らないのであらうか。私にはそれが不思議である。ブレハーンフ『史的唯物論』に於てさへも、

ヘーゲル及びマルクスの矛盾が、いかにルツソーの夫と相違するかを、極めて鮮やかに説かれて居る。

繰返して説いたやうに辯證法の論理はマルクス學說の出發點であり、又その根本的方法論である。その中心をなす矛盾をすらもよう飲み込めて居ない河上博士は、果して『マルクスの完全なる理解者』であらうか。私の疑ひと云ふのはその點である。かゝる理解者を以て最大の巨人とせねばならぬのは、我がマルクス學界のために遺憾に堪えない。

3

しかし何時までも河上博士を問題として居ても仕方がない。我等は進んでマルクスの思想を検討しやう。

マルクスの社會思想は従前の社會思想とは相違してゐる。それは科學的思想に立脚してゐる所に存する。そこに彼等の大いなる誇りがある。その科學的思想と云ふのは、唯物論的辯證法に立つ唯物史觀なのである。マルクス唯物史觀は然るに、十八世紀に於るフランスの啓蒙思想家が唱へた唯物論とは、又異なつてゐる事知らねばならぬ。フォイエルバツハやエルベチウスの如き十八世紀のフランス啓蒙思想家は、人間が環境の成果だと觀た。彼等は人類の社會的並びに智的進化を、人類の物質的

必要に依つて説明しやうと試みた。要するに彼等の唯物論的思想は、かゝる所に根基が存するのであるが、つまり宇宙の根柢をば物質に還元しやうとする形而上學的唯物論であつた。

然るにマルクスの唯物史観はかゝる唯物論ではなかつた。彼等は依然人間の精神的要素を認めやうとはした。只彼は社會の歴史的發展變化が、物質に依つて變化すると云ふのである。即ちかゝる所に唯物史観と稱せらるゝ理由がある。ところでマルクスに依れば、社會が二つの階級に分割されるのは、資本主義の有機的法則をなすのである。その二つの階級の闘争に於ては、當然無産階級が勝利を占めると、云ふのである。相互に闘ふ所の社會の諸々の階級は、常にその時代の生産諸關係の産物なのである。かゝる考へは彼等の骨子を成すものであるが、そう云ふ思想の根柢には、次ぎの如き思想が基礎をなしてゐる。即ち社會的存在は、吾等の意欲や意識や或ひは意圖に依存するものでない。否、却つて吾々の意識や意志や意欲などが、社會的存在に依つて規定されるのである。

蓋し彼等は「頭の中の觀念をば、唯物論的に實在の模造だと考へる」(河上博士「第二貧乏物語」一〇〇頁)それでマルクスは資本論第二版の跋文に明瞭に云つて居る。即ち「現實的なるものが、ヘーゲルにあつては、觀念的なる創造に依つて創造せられる。然るにマルクスにあつては、觀念的なるものは人間の頭腦に把握され、翻譯移植されたものに外ならない」と。既にかく考ふる彼等にとつては、それだから次ぎの様な事は珍らしいものではない。

「即ち人間がその上に住んでゐる地球は、人間が頭の中から考へ出したものではない。それは人間が一定のプランに基いて構成したのではない。人間の頭は勿論のこと、人間そのもの、乃至その他の生物もまだ存在してゐなかつた頃から、地球は既に存在してゐたのである。それは人間の意識から獨立に存在してゐる。そして人間がそれを信じやうと否とに拘らず、地球は絶えず太陽の周りを廻つてをり、また人間がそれを豫期しやうと希望しやうと否とに拘らず、自身の内部で絶えず運動を(例へば地震といふが如き運動を)起してゐる。これ迄の殊に、人間が彼等自身の社會的關係を意識的に統制する事ができず、むしろ逆にかかる社會的關係の制御のもとに、無意識的に引きずられてゐる限り、社會組織に對する人間の意識の關係は、この地球に對する人間の意識の關係と同じである。」(河上博士「第二貧乏物語」三九頁)

ところが、この議論は極めて明瞭のやうではあるが、單なる常識論を出でないもので、何等學的價値をもたない。蓋し斯様な考へには、必然に獨斷がひそんで居る。即ち

a、客觀に實在がある事

b、吾等はこの實在を認識し得るといふ能力を有つてゐると云ふ事

この二つが暗々の裡に前提されてゐる。之は既に、カントの批判主義に依つて指摘せられた所である。何等の批判反省も加えないで、かかる前提や豫想をば無條件に許す事をば、カントは獨斷論だと

稱んだ。この獨斷論はカント以前の哲學には凡べて共通なものであつた。それだから、既にそれはカントに依つて充分克服されてゐるのである。マルクスは哲學史を一度でもよい讀んで居たかどうかとあやしまないでは居られない。あれ程歴史に詳しかつた彼にして今更こんな議論が出るのは、銀座街頭に白晝強盜が這入るのよりも奇怪至極な事である。要するにマルクスの學説は、實在論に於いては唯物論である。認識論上から云へば素朴的實在論を出でない。現代の新らしい思想といふ程の事もない。三千年以前希臘に於て既に唱へられた所である。何も新らしがる必要もなければ、哲學説だのといつて威張られる筋合のものではない。極めて平凡なる常識論より一步も出でては居ないのである。だのに偉さうに威張つてゐる人の氣が知れないではないか。

フリードリツヒ・アルベルト・ランゲに依れば、唯物論は哲學とその年齢を等しくする。世界の渾一を承認し、又神話的解釋をしりぞけて、自然的説明を試みたのは實に唯物論であつた。唯物論の功績は目的觀を排斥して機械的説明を嚴密に押し通し、世界を必然的法則に依り支配せられるものとして理解しやうとする所にあつた。腦及び神經の官能と云つても、他の自然現象と同様に、一般の物理的及び科學的法則に依つて説明せらるべきである。然るに彼等は神經系統に於ける物質的進行をば、精神進行と因果の關係に持つて來やうとした。かくの如きは、謬見も甚だしいものと云はねばならぬ。考へてもみるがいゝ。外界より來た刺戟は感覺に觸れてその神經に、一定の變化を與へる。その變

化は求心神經を傳はつて、腦に達する。腦を發した物理的進行は、遠心神經によつて筋肉に傳播し、運動を起す。この因果の連絡はいづこに於いても決して中斷することはない。求心神經に於ける進行をば感覺の原因となし、又は遠心神經に於ける進行をば、意志の動作の結果とするのは、物理的進行を中斷するのである。今物理的進行の場合のみを考へるならば、第一の場合に於いては結果なき原因があらうし、第二の場合に於いては、原因なき結果がある事となる。かくの如き事は有り得べき事ではない。(以上波多野博士『西洋哲學史』三百四十頁参照) 詳しく説く迄もなく之に依つて唯物史觀の難點は十分に突かれて居るし、その學問的權威がどんなものであるかゞ理解出來やう。

彼等唯物論者は、客觀の世界をば、その儘認識する事が出來ると考へてゐる。そして客觀界の事實が、吾々の頭腦を規定するものとなした。然るに吾々の頭腦は、忠實な客觀界の寫眞でもなければ、事實をその儘吾々が寫し得るものでもない。世に探偵小説なるものがある。之は所謂實話文學の典型的なものとなつてゐる。然るに實話必ずしも實話でなく、事實が眞の事實でもない。之に就いて濱尾四郎氏をば、今私は思出すのである。少し長いかも知れないが、面白いので引用して見やう。

『いはゆる實話が、真相を傳へて居ない場合に二つある。一つは實話の筆者が自身、意識して物語りを面白く傳へやうとして筆を弄し、勢ひ餘つて脱線する場合、これは責任のある所は問題ない、馬鹿を見るのは實話だと信じて面白がつてゐる讀者だといふ事になる。

第二は、筆者はまじめに實話と思つてゐるのだけれ共、その材料の供給者によるしきを得なかつた場合

で、この際は必ずしも筆者を責めるわけには行かない。僕はこの場合を思つて、筆者と讀者に、特に注意する。ある事件の實話を傳へるためには決して一つの源泉からのみ材料を得てはならない、と。

我國の事件ならば然し材料の得方もわりに拮据だけ共、外國の實話になると中々これが面倒臭い。堂々と公判に付せられた事件に随分異論があるのだから氣をつけないととんだまちがひに陥る。

例をあげると、有名なマドレーン・スミスのお話。マドレーン・スミスといふ婦人が彼女を脅迫したエミール・ランジュリエといふフランス人をアルセニツクで毒殺したといふ事件があるが、これは一八五七年六月三十日に裁判にかけられた。その結果無罪といふ事になつたのである。ところが、この事件を記してある記録を見ると、その筆者によつてまるで反對な事が書いてある。

スミスをひいきしてゐる方にはせると、彼女は實に不幸な女なので、全く無實の罪で起訴されたといふ事になつてゐる。しかし反スミス側にはせると、あれは裁判の誤りで、彼女は當然有罪であつたに拘らず、彼女の美しさと粧つた無邪氣さが、法廷の空氣をへんにしたのだ、といふ事になつてゐる。彼女が法廷で、何かいふ事はないかと問はれた時、何らの不平もいはずた。

「これで、獄舎にビアノがあるとうれしいんだけれど」といつた事は有名な話である。

スミスの無罪を信じてゐる人達によると、涙のこぼれるやうないじらしい言葉として傳へられてゐるが、反スミス側の人にはせると、それは「犯人でなければよそほへない冷靜さと手にいつた無邪氣さ」とであつた事になる。

反スミス側の記録には釋放されてからの彼女の一生を論じ、養味増にやつつけて居る。

これなどは極端な一例だけれども、此のどつちかのレコードだけ 讀んで傳へたのでは、讀者を誤りは

しまいかと僕は思ふのである。

一九〇八年十二月二十一日グラスゴウのウエストストリート、クイーンズステレス十五番地の二階の一室でマリオン・ギルクライストといふ老婆が殺された。

この殺人犯人はオズカー・スレーターといふ人物で、一九〇九年五月三日からその公判が開かれた。さうして判決は五月六日に下され、有罪といふ事に極り、死刑を言渡されたが、後、減刑されて終身懲役といふ事にきまつた。

ところがこの裁判が大に誤つてゐるといつて、第一に天下の輿論を動したのはかのコーナン・ドイルであつた。彼は一九一二年「オズカー・スレーター事件」といふ一小冊子を出してこれを世に問うたのであつた。

一九一四年再審に付せられたけれ共、やはりスレーターは有罪と認められたのである。

コーナン・ドイルの著書を見ると、全然スレーターは無實の罪を負うてゐるやうだ。明かに無罪である。あんな明かな事件に對して裁判長グリスリー卿がどうして有罪のいひ渡しをしたかと思はれるやうである。

事實は唯一つでも見方は人によつてそれ／＼に異なる。

實話の真相を傳へる事又難いかなの歎を久しうせざるを得ないのである。(東京朝日新聞昭和六年一月所載『筆の犯罪』)

哲學的思索には、餘り縁のないと思はれる文學者に於いてすら既に、事實必ずしも事實でないといふ事が理解せられる。さればこそ素朴的實在論が學説として成り立たない事が、證明されたのは既に遠い昔である。今更論駁するのが、馬鹿々々しい程なものである。哲學的思索に馴れない河上博士が、

かゝる思想を後生大事に捧持されるのに不思議はないが、學殖豊かにして頭腦透徹せるエンゲルスやマルクス等が、之で満足してゐるのは如何にしても解き得ない私の疑ひである。

こんな低級未開な哲學思索をもつて居ながら、自ら『獨逸觀念論の正流』だと號するも誠に、滑稽至極の話である。そしてヘーゲルの辯證法をば逆立ちして居るなどは、陣笠の議員が大統領に喰つてかゝるより可笑しく思はれるのである。ヘーゲルの辯證法はカント觀念論の徹底である。獨逸觀念論の必然なる歸結である。もしマルクス學徒が唯物論辯證法をば、正しき姿に於て維持せんと思ふならば、新に出直して觀念論の根柢から粉碎してかゝらなければならぬ。然るに彼等は單に原始素朴な認識論しか持ち合はさない。彼等に之を求むるのは酷なるも甚しい。而もかく誤用されたる辯證法を以て、一かどの哲學體系などと心得て居るのは、うちの坊やが沙翁のペンを偶然にもらつて來たからと云つて、一大文豪になつたのだと思ふのよりも愚である。

既に彼等の牙城が、かく迄もろくして果敢ないものである以上、爾餘の細々しい難點を一々指摘するのは痛々しい限りである。士のよくす可き處ではないから、私は之で筆を擱かうと思ふ。

(六、一、二五、奈良丹波市への車上にて)。

ヘーゲル年表

一七七〇年(出生)	八月二十七日カルル、オイゲン公の執事(後にヴェルテンベルクの高位の名譽職)たるゲオルグ、ルドウィツヒ、ヘーゲルの長男として、ストウツトガルトに生る。	一七九〇年(二〇歳)	秋、マギステル、デル、フィロソフイの稱號を得。(シエリング十五歳の若年を以つて同大學に入り來りヘーゲルと相識る)
一七七五年(五歳)	ラテン語學校に入學。	一七九三年(二三歳)	秋、神學科課程を終了す、一度、郷里に歸り、間もなく瑞西ベルンのシュタイガー、フォン、チュツグ家の家庭教師となつて赴く。
一七七六年(六歳)	悪性の天然痘に罹り、既に一命も危まる。	一七九五年(二五歳)	五月九日より七月廿四日迄を費して『基督傳』を書く。十一月參日より『既成宗教概念の批判』起稿。
一七七七年(七歳)	秋、ギムナジウムに入學、(一七八七年秋まで十年間在學)。		
一七八〇年(一〇歳)	九月母を喪ふ。		
一七八八年(一八歳)	秋、テュービンゲン大學に神學科の學生となる。(ヘルダーリンと同		

一七九六年(二六歳)

四月二十九日同著脱稿(後一八〇〇年改作)秋ベルンを去つてストウツトガルトに歸り、友人達と舊交を温む。

一七九七年(二七歳)

ヘルダーリンの紹介にて同市の商人ゴーゴルなる人の許に家庭教師となる。

一七九九年(二九歳)

一月父を喪ひ、遺産の分配約三千グルデンを得。

一八〇一年(三一歳)

一月郷里を去つてイエナに赴く。茲にて『フキヒテ及シエーリング哲學體系に於る相異』を書く。八月同地の大學に講師となる。

一八〇二年(三二歳)

シエリング(當時既に同大學の教授)と共に、『哲學評論』を發行し、二人の署名なしに執筆す(但し二卷六冊を發行せしのみにて翌

一八〇六年(三六歳)

年刊す) 二月より第一の主著、『精神現象論』の印刷に取掛りたるも、種々の事情によりて完成せず。十月十三日イエナ市はナポレオンの軍に依りて占領せられ大學も亦閉さる。

一八〇七年(三七歳)

一月、右の『精神現象論』序文と共に完成す。この書の寄贈後シエリングとヘーゲルとの交友全く絶ゆ。三月、友人なる高等學務委員ニートハンマーの紹介により、バンベルクに於いて新聞の編輯を擔當す。

一八〇八年(三八歳)

同新聞の發行停止(十一月)後、再びニートハンマーの紹介に依りてニュルンベルクのギムナジウムに

一八一一年(四一歳)

校長として聘せらる(一八一六年迄在職)

九月十六日ニュルンヘルグの元老院議員カルル、フライハル、トゥレエル、フォン・ジンメルスドルフの娘マリア(二十一歳)と結婚す。

一八一二年(四二歳)

第二の主要著『論理學』の第一卷を著す。

一八一三年(四三歳)

同著の第二卷を著す。

一八一六年(四六歳)

七月、同書の第三卷完成秋、ハイデルベルク大學に哲學科の正教授として招かる。

一八一七年(四七歳)

春、第三の主要著『哲學集成』の第一版を著す。

一八一八年(四八歳)

秋、ベルリン大學に哲學科の正教授として招かる。

一八二一年(五一歳)

『法律哲學』を著す。

一八二七年(五七歳)

エンチクロペデイの訂正第二版出版。

一八二九年(五九歳)

十月より總長の任に就く(翌年十月まで在任)。

一八三〇年(六〇歳)

エンチクロペデイ訂正第三版出版

一八三一年(六一歳)

精神現象論の訂正第二版の準備に取掛りたるも果さず、十一月十四日コレラ病に罹りて歿す。



ヘーゲル哲學物語普及版

昭和六年二月二十三日
昭和六年四月二十八日
昭和六年五月三十日
昭和六年十月十七日
昭和八年四月十一日
發行
發行
發行
發行
發行

著者 松原 寛

發行者 株式會社 同文館
東京市神田區通神保町一

森山章雄

印刷者 山縣精一
東京市神田區今川小路一ノ一

定價金五十錢

山縣製本印刷株式會社製本

著名行發館文同

著者	書名	體裁	定價	送料
奈良靖規	民族理想に立つ修身教育	菊 クロス 裝判	三、〇〇	一四
稻垣末松	批判主義 に基づく哲學的 教育學	菊 クロス 裝判	四、八〇	一四
松原寬	ウヰン バンド 哲學の根本 問題 上 下 卷	菊 クロス 裝判	三、三〇 三、二〇	一四
稻垣末松	リツプス 美學大系	特 製 普 及 版	七、九〇 九、五〇	二二
藤井健治郎	改訂 リツプス 氏倫理學の 根本問題	菊 クロス 裝判	三、八〇	一四
赤松要	ヘーゲル 哲學と 經濟科學	菊 クロス 裝判	二、八〇	一四
松原寬	ヘーゲル と歴史 哲學	菊 クロス 裝判	二、八〇	一四

著名行發館文同

著者	書名	體裁	定價	送料
社會學 研究會	文化社會學 叢書 イデオロ ギー論	菊 クロス 裝判	一、五〇	一〇
同	文化社會學 叢書 知識社會 學	菊 クロス 裝判	一、五〇	一〇
同	文化社會學 叢書 文化社會 學	菊 クロス 裝判	一、八〇	一〇
井藤半彌	社會思想 と近代生 活	四 六 装 判	一、二〇	六
大泉行雄	社會思想家 としての ジョン スチュ ア ート・ミ ル	四 六 装 判	一、八〇	一四
浦口文治	ジアン ・ラス キン	四 六 装 判	三、二〇	一四
川村豐郎	判斷力 批判の 研究	菊 クロス 裝判	一、八〇	一〇

著名行發館文同

著者	書名	體裁	定價	送料
建部 遯吾	社會教育勅語新衍義	美四六裝	並上二、〇〇〇 並一、〇〇〇	各一〇
同	社會戊申詔書衍義	美四六裝	並上二、〇〇〇 並一、〇〇〇	各一〇
同	國民振作癸亥詔書衍義	美四六裝	並上二、〇〇〇 並一、〇〇〇	各一〇
池岡 直孝	國體觀念の研究	美四六裝	一、九〇	各一〇
池園 哲太郎	青年と語る	美四六裝	一、九〇	一〇
森本 厚吉	滅び行く階級	ク四六裝	二、八〇	一〇
竹林 熊彦	國民主義と國際主義	ク四六裝	二、五〇	一〇
赤神 良讓	人種問題	ク四六裝	二、五〇	一〇

著名行發館文同

著者	書名	體裁	定價	送料
原 勝郎	日本中世史の研究	ク菊六裝	七、八〇	一四
同	西洋中世史概説	ク菊六裝	三、五〇	一四
同	世界大戦史	ク菊六裝	特五、八〇	一四
伊藤 政之助	名將奈破崙の戰略と外交	ク菊六裝	二、八〇	一四
松本 信廣	日本神話の研究	ク四六裝	二、〇〇	一〇
松村 武雄	神話學論考	ク四六裝	三、八〇	一四

同文館發行名著

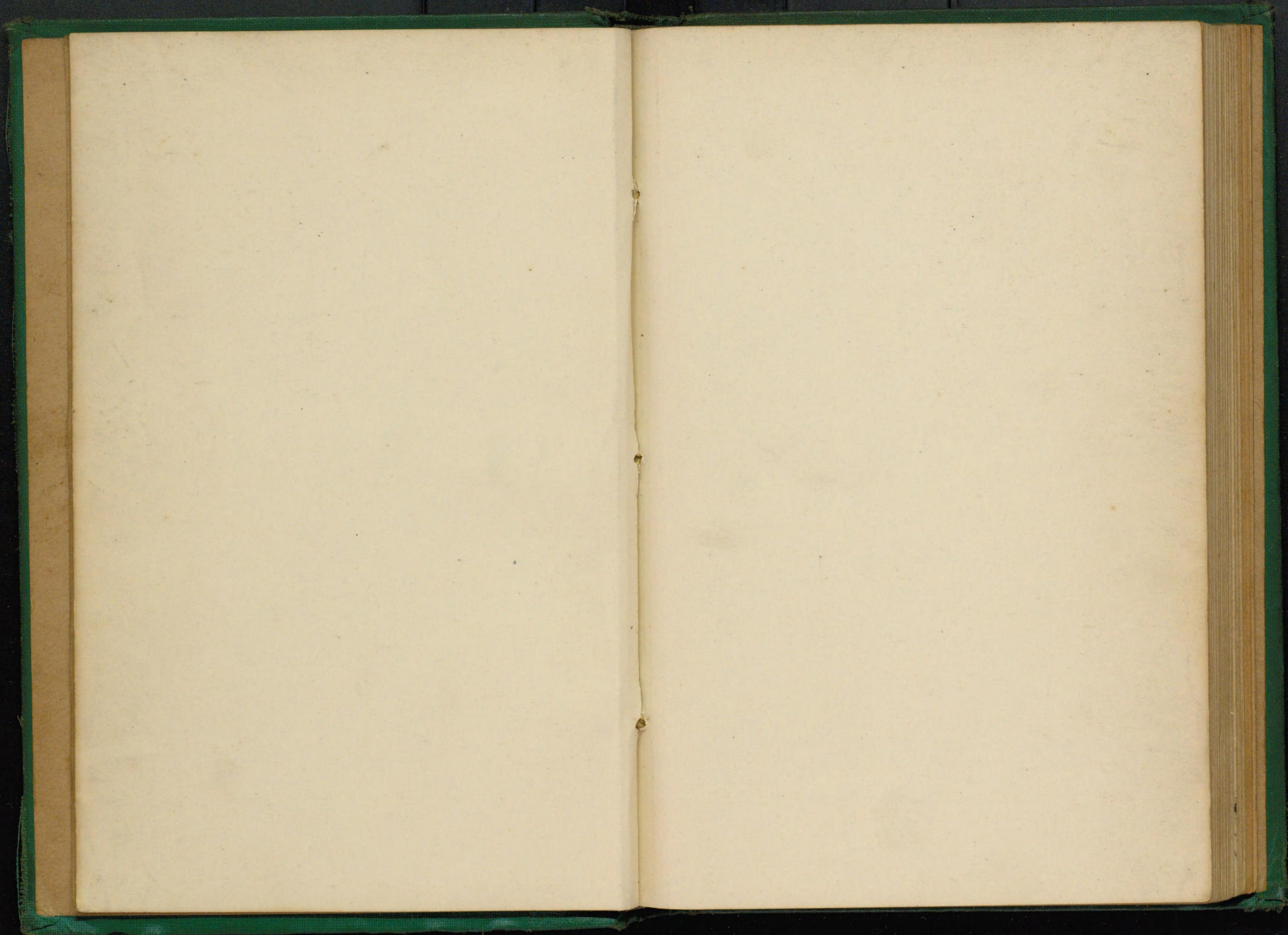
著者	書名	體裁	定價	送料
福島政雄	宗教的自覺と教育	四六判 クロス装	一、八〇	一〇
同	教育の理想と生命	四六判 クロス装	二、〇〇	一〇
同	教育より見たる女性と母性	四六判 クロス装	二、四〇	一〇
深作安文	國民道德概説	四六判 クロス装	一、六〇	一〇
建部遯吾	教育政治學	菊 ロス装	四、八〇	一四
入澤宗壽	訂補増文 教育學と體驗教育	四六判 クロス装	一、六〇	一〇
野田義夫	教育學概論	菊 ロス装	四、五〇	二二
同	丁抹國民高等學校の研究	四六判 クロス装	二、〇〇	一〇

同文館發行名著

著者	書名	體裁	定價	送料
波多野完治	兒童心理學	四六判 クロス装	二、五〇	一四
原田實	新教育叢書 第一編 新教育の樹立へ	四六判 クロス装	一、五〇	一〇
新教育協會	新教育汎論	四六判 クロス装	一、〇〇	一〇
草場弘	教育者は悩む	四六判 クロス装	一、〇〇	六
關寛之	教育の基礎としての本能	菊 ロス装	三、五〇	一四
志垣寛	生活を教育にまで	四六判 クロス装	一、六〇	一〇
植木謙英	生活より宗教へ	四六判 クロス装	一、九〇	一〇

同文館發行名著

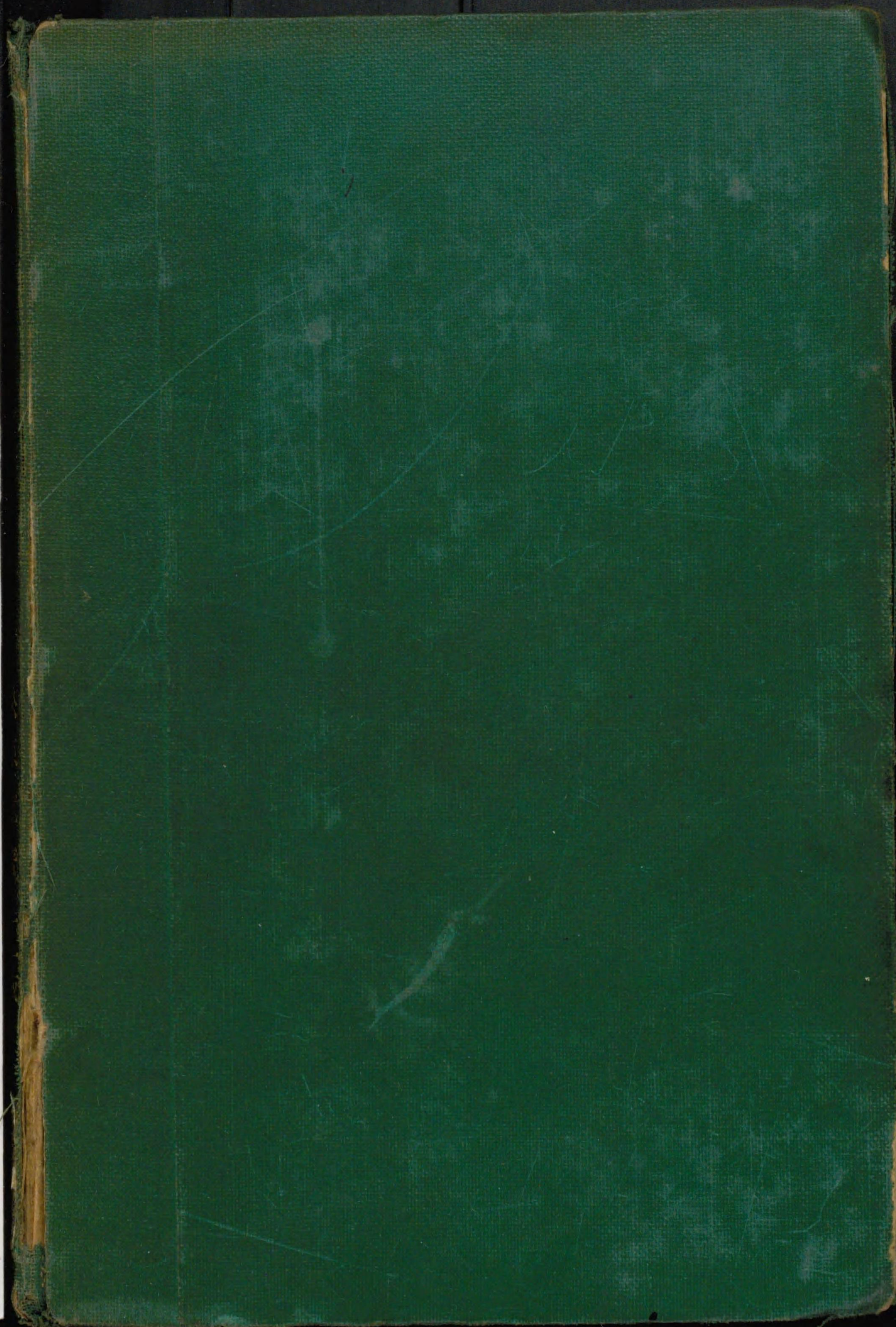
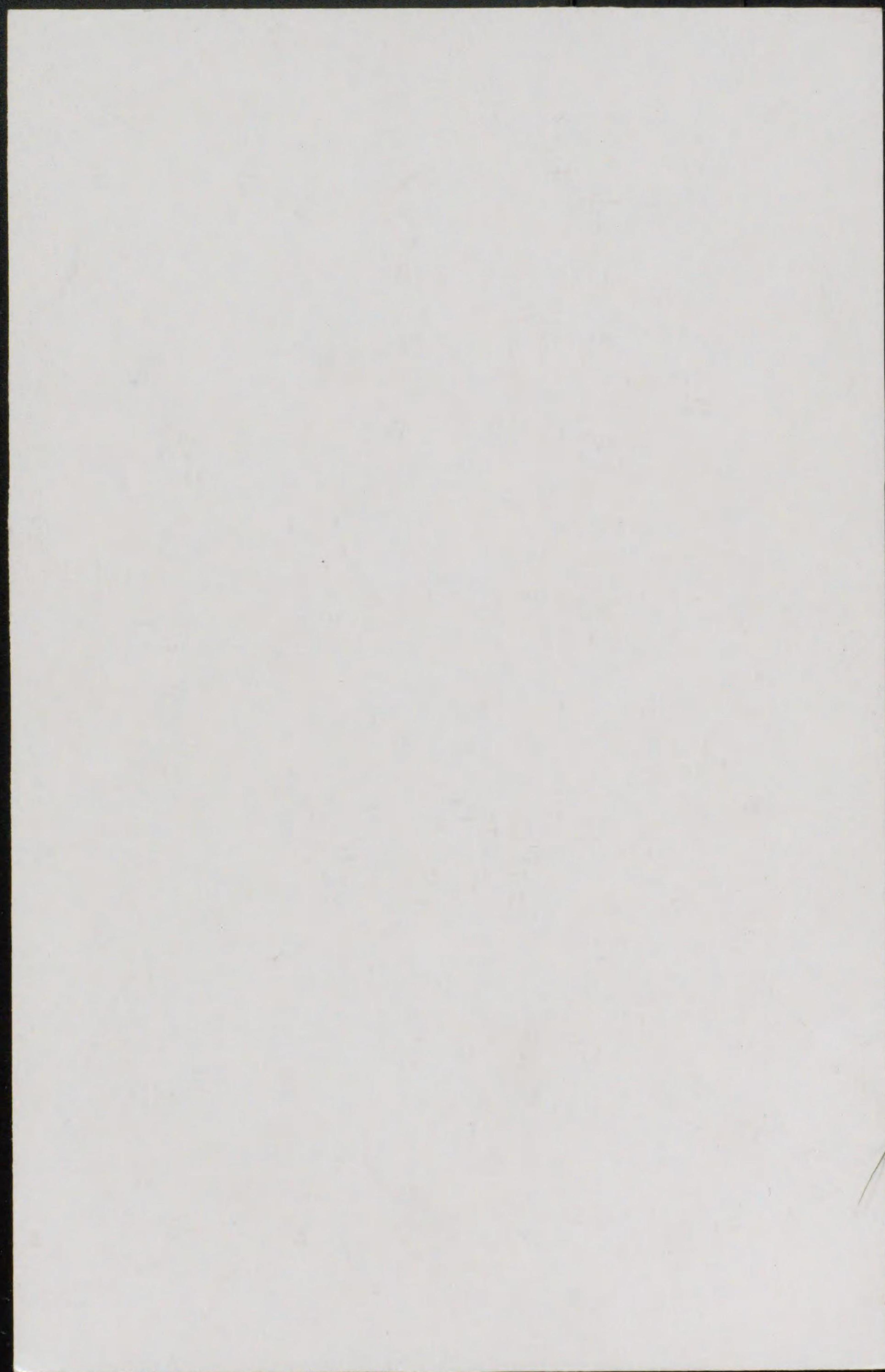
著者	書名	體裁	定價	送料
姉崎正治	増訂 切支丹宗門の迫害と潜伏	菊 クロス 装判	三、八〇	一四
同	切支丹禁制の終末	菊 クロス 装判	二、三〇	一〇
同	切支丹傳道の興廢	菊 クロス 装判	六、五〇	二二
同	切支丹宗門の人物と事蹟	菊 クロス 装判	四、八〇	二二
同	切支丹宗敎文學	菊 クロス 装判	七、〇〇	二二
高野正治	宗敎發達の原理	菊 クロス 装判	二、八〇	一四
原田敏明	宗敎の心理學的研究	菊 クロス 装判	二、八〇	一四





¥. 50

609
195

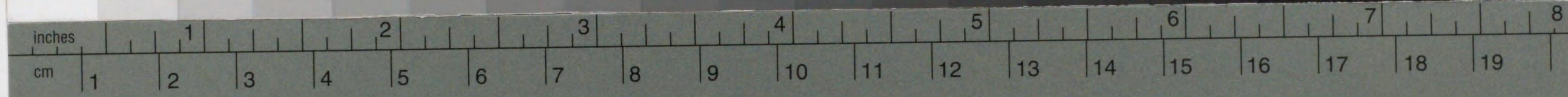


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

